

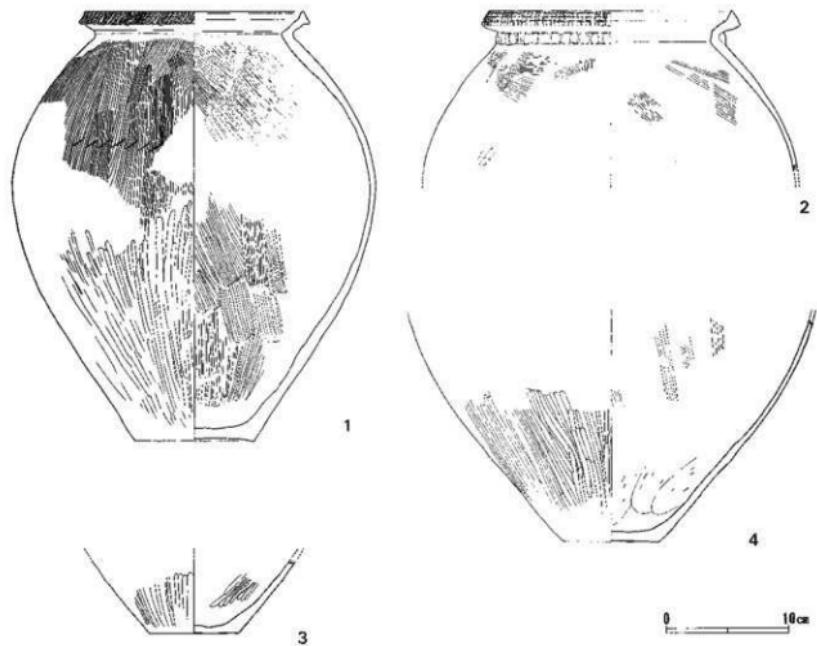
第81図 黒色粘土中遺物出土状況実測図 ※黒刷土上層
赤刷土下層

木製品に比べると、土器は量的に少ないが、中には完形品となるようなものも含まれており、貴重な資料となった（第82図）。

1は、ほぼ完形品となる甕で、底径9.8cm、口径17.8cm、器高35.3cmを測る。口縁部は上下にやや拡張して「く」の字状に屈曲し、その平坦面には刺突具による刻目文を施している。最大径は胴部中位よりやや上方にあって、やや強く張り出す。外面は頸部下から胴部中位にかけてはハケ、その下方にはタテ方向のミガキがなされており、最大径を有す胴部には2枚貝の腹縁を使用したと考えられる貝殻文が施されている。内面は頸部下からほぼ全面にケズリ調整を行った後、ハケによる調整がなされている。

2は、上下にやや拡張した口縁部にヘラ状工具によってヨコ方向に3条の沈線、タテ方向に多数の沈線を入れて格子状の文様で飾っている。外面頸部には指頭圧痕文帯が貼り付けられ、その下方はハケによる調整がなされている。また、胴部最大径付近には刺突列点文が認められる。内面は頸部下からケズリ調整を行った後、ハケによる調整がなされている。なお、4は、色調や焼成から2と同一品と考えられることから、この甕は外面の胴部中位から下方はタテ方向のミガキ、内面底部付近はケズリによる調整がなされていると考えられる。

3は甕か壺の底部であるが、内外面ともタテ方向のミガキにより仕上げられている。ややミガキが



第82図 黒色粘土中出土土器実測図

粗雑になされているのが特徴である。

以上のような土器は、松本編年IV-I様式に相当する資料であり、弥生時代中期後葉にあたるものであろう。

木製品

木製品は、調査区の西側に広く堆積している黒色粘土中のみからの出土である。しかし、木製品が出土している範囲は、西側約10mほどで、その東側の黒色粘土中からは出土していない。木製品は多数出土しており、以下、用途別に記述する。

a. 農耕具類（第83図、第86図）

農耕具類には鍬の未成品や、鋤の一部などが出土している。樹種はいずれもアカガシ亜属に属している。

1は、広鍬の二連結未成品である。刃部に向かって長く下垂する柄つぼを穿つための長方形状の隆起を、周辺を削り出すことによって作り出している。刃部は斜めに削り落されてはいるが、完全ではない。連結部は、両面から斜めに削られ、V字状を呈し、すぐに切り落せる状態である。加工痕は両面とも比較的良好に残っており、ノミ状の工具痕が認められる。なお、裏面のゲタは存在しない。

1のような鍬は、隆起部への穿孔は認められないが、全体としてほぼ形状が整っており、切り離し、隆起部に穿孔すれば完成する、未成品としては最終段階のものである。なお、この鍬はSD01底面直上から出土している。

2は、片端が一部欠損しているが、狭鍬の二連結未成品である。製作工程としては初期の段階で、柄つぼを穿つ隆起部を作り出そうとしているが、形状は明確ではない。刃部は斜めに削り落とされているが、1に比べるとやや粗く、厚さもある。連結部は一部欠損しているが、切り離しのための切れ込みが認められる。しかし、V字状となるまでには至らず、切れ込みも少ない。加工痕はあまり残っていないが、僅かにノミ状の工具痕が認められる。

3は、丸鍬の未完成品である。中央部に隆起を有し、穿孔したものと考えられるが、約1/2が欠損しており、現状ではわずかに残る隆起部に穿孔したと考えられる痕跡が認められるのみである。厚さは端部で約5mm、隆起部でも約1cmと薄く、下端部は平坦に作り出されている。加工は非常に丁寧になされており、ノミ状工具痕が残っている。なお、このような丸鍬は、福岡県那珂久平遺跡⁴⁴において、直柄平鍬と組合って出土したことから、泥除として機能することが分かっている。

24は鋤か鍬の一部であろう。大部分が欠損しているが、僅かに残っている先端部は、やや斜めに切り落され、加工も丁寧なことから、完成品と考えられる。25、26はいずれもアカガシ亜属に属することから、両端が欠損しているものの、鋤か鍬類の歯であろう。27も同様に鋤か鍬類の歯であろうが、一部が焼けており、一ヶ所に穿孔（虫喰いの可能性あり）が認められる。29も鋤か鍬類の歯と考えられるが、厚みがあることから未完成品の可能性が強い。

b. 食器（第84図）

食器は2点出土している。

5は、スプーン状木製品の未成品である。柄の部分裏面には、握りやすいように段を作り出しているが、食物を盛る部分は加工途中で、深さを有しない。加工痕は裏面に良好に認められる。樹種にはケヤキを使用している。

6は、椀の完成品である。削り抜きにより作られており、底部には高台を有している。口縁端部はやや内側に向かって斜めに削り落とされており、側面の片側には節が認められ、突き出ている。形状は、底面、上面とも橢円形を呈し、器高は8.6cmを測る。樹種にはヤマグワを用いている。

c. 漁撈具（第84図）

タモ枠が1点出土している。

14は、タモ枠の一部で、自然木の小枝を選び、大部分は樹皮を剥いだだけの状態である。一部には樹皮が残っているが、先端には抉りが認められ、繋ぎ合させて使用したものであろう。樹種にはイタヤカエデを用いている。

d. 柄（第84図、第89図）

柄と考えられるものは3点出土している。

9は、断面の形状が梢円を呈している。片側は欠損しており、本来はより長さを有していたことが明らかである。片面に残っている端部は比較的丁寧に削り落とされており、全体が焼けている。樹種にはウバメガシを用いている。農具類の柄として使用された可能性があろう。

13は、断面半月状を呈す棒状のもので、片端は欠損している。樹種にはスギを用いている。

35は、長さ120.5cmを測る長物で、断面は長方形状を呈している。片側は欠損しているため、本来はより長いものであったことが明らかである。樹種にはスギを用いている。

e. 燃えさし（第84図）

燃えさしとは、火鐵白などで火をおこす際に火種として使用されたものである。

7、11、12が燃えさしと考えられるものである。いずれも先端を細く削り出し、燃えやすいように加工されている。11は、その典型的なもので、両端から三角形に丁寧に削り出されており、焼けた跡が残っている。7、11はヒノキ科の樹種を用い、12にはスギが用いられている。

f. 部材の余り（第85図、第87図）

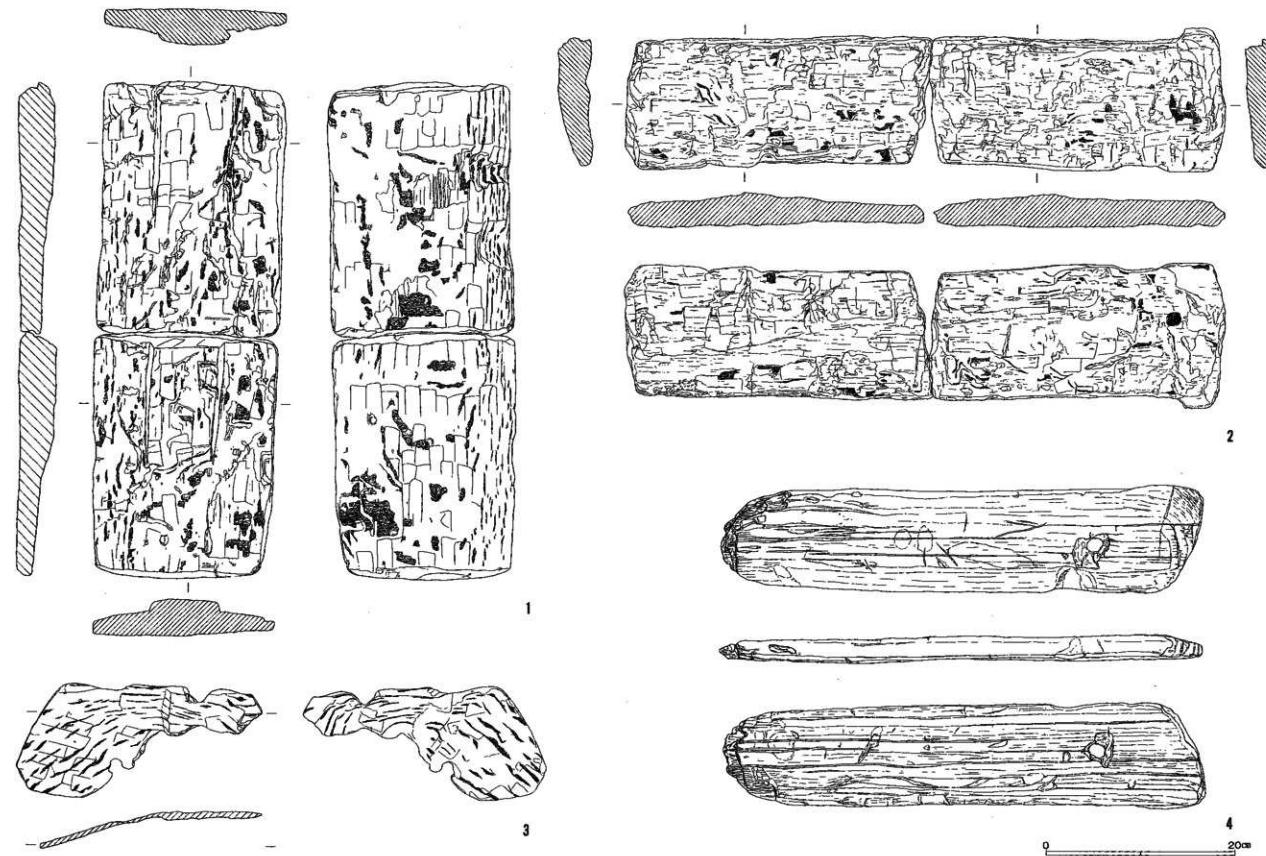
部材の余りと考えられるものには、18、19、28がある。

18は両端が切り落とされて、ややいびつな形状をしている。19は中央に節があることから、節の部分を嫌って両側を使用したものと考えられ、両端を斜めに切断している。28は大きめのミカン割材から、両側を切り落として使用したものと考えられる。

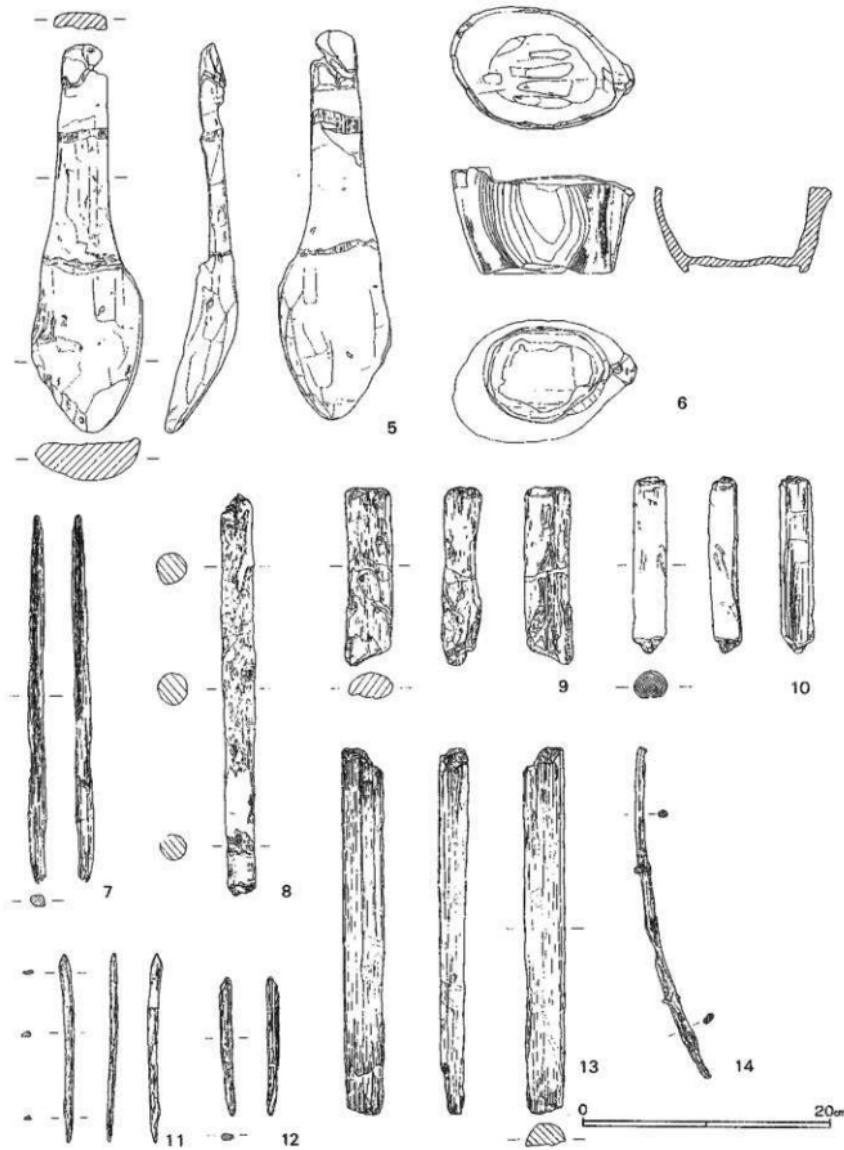
樹種にはいずれもスギを用いている。

g. 板状木製品（第85図、第86図）

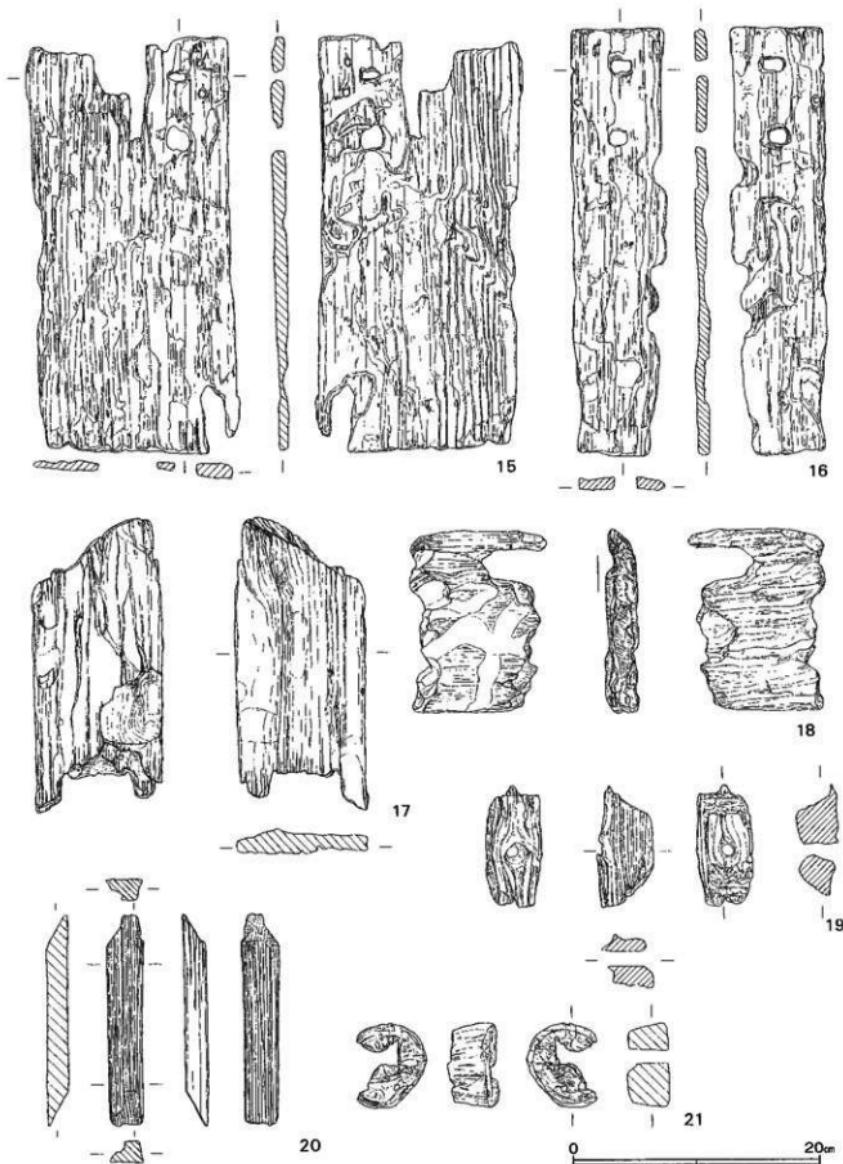
用途不明で孔を有しない板状木製品をここで取り上げる。



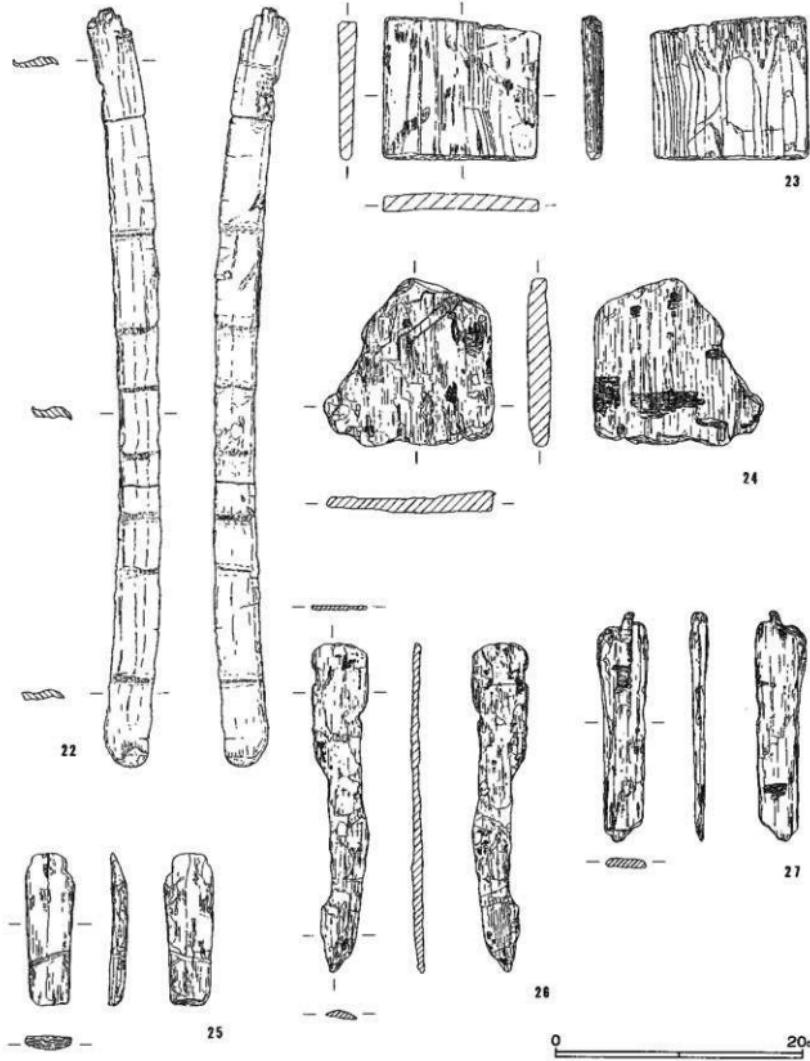
第83図 木製品実測図(1)



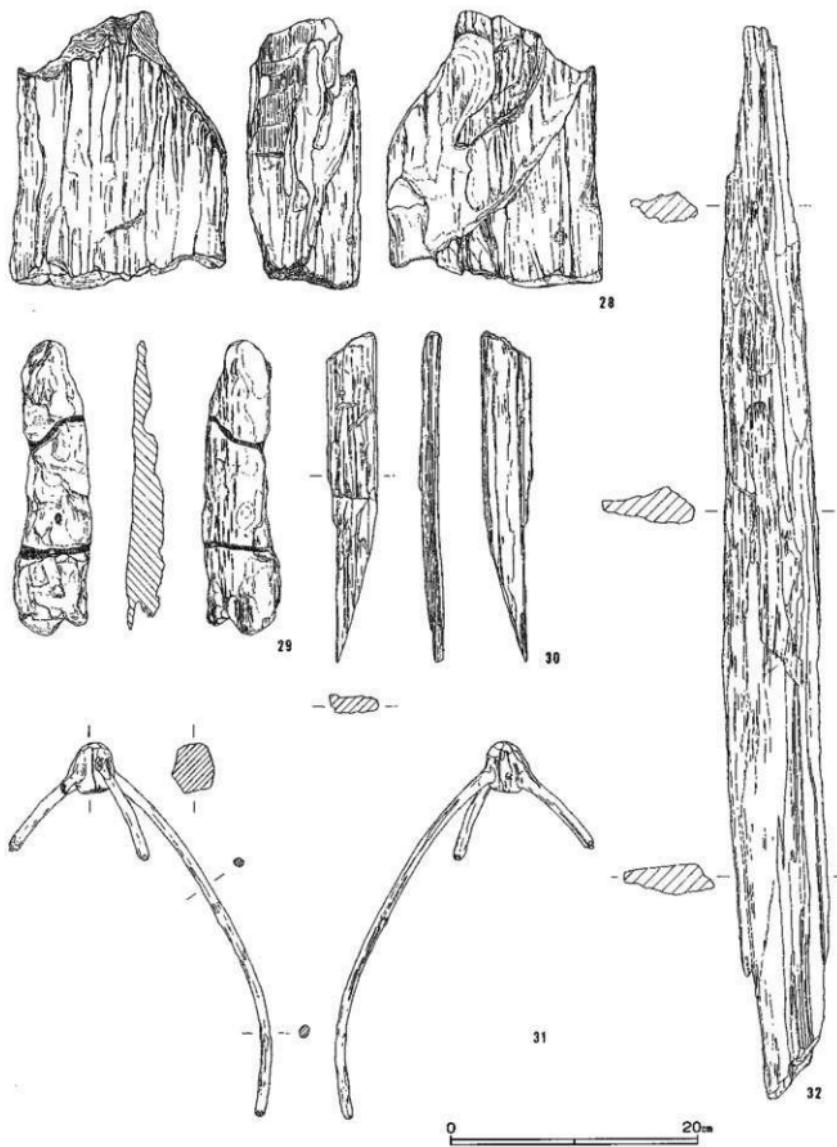
第84図 木製品実測図(2)



第85図 木製品実測図(3)



第36図 木製品実測図(4)



第87図 木製品実測図(5)



第88図 木製品実測図(6)

17は両端が欠損しているため元の形状が不明であるが、片面は側面に向かって斜めになるように加工されている。樹種にはスギを用いている。

23は、両面とも丁寧な作りで、ノミ状工具による加工痕も良好に残っている。片端は欠損しているが、一方は両面から斜めに削り出されており、1の綫二連結未成品の連結部に残っていたV字状の切れ込みに似た形状をもつ。形状は鋸、歯類と似ているが、幅が約12.5cmと狭く、樹種もヒノキを用いていることから、他の用途を考えるべきであろう。

h. 有孔板状木製品（第83図、第85図、第88図）

用途不明で、孔を穿った板状木製品をここで取り上げる。

4は1ヶ所に孔を穿つ木製品である。孔は粗雑に作られているが、孔の片側から斜めになるように加工された側面にかけては紐で縛った際にできる擦り切り痕が認められる。片側端部は丁寧に切り落とされているが、一方は粗雑である。これらの状況から、一旦製品として使用されていたものが、二次的に杭に転用されたものと考えられる。製品としては、大足、田下駄などが想定される。樹種にはスギを用いている。

15、16は同一のもので、大孔2、小孔4を有する板状木製品となる。15の右図左側に認められる抉りのような痕跡は、16の右図右側に認められる痕跡と一致し、1つの小孔となっている。用途は不明であるが、樹種にはスギを用いている。

33は、2つの孔を穿つ長物の木製品である。孔は比較的丁寧に作られているが、紐で縛ったような痕跡は認められない。片端は丁寧に切り落とされているが、一方はやや粗雑に尖るように切り落とされている。一旦製品として使用されていたものが、二次的に杭に転用されたものと考えられる。製品としては扉などが想定される。

i. 棒状木製品（第84図、第85図）

用途不明の棒状木製品をここで取り上げる。

10は自然木から樹皮を剥ぎ、片面を削り出している。削り出した面にはノミ状工具による加工痕が良好に残っており、先端は削り出して中心に突起を作り出している。樹種にはイスマキを用いているが、用途は不明である。

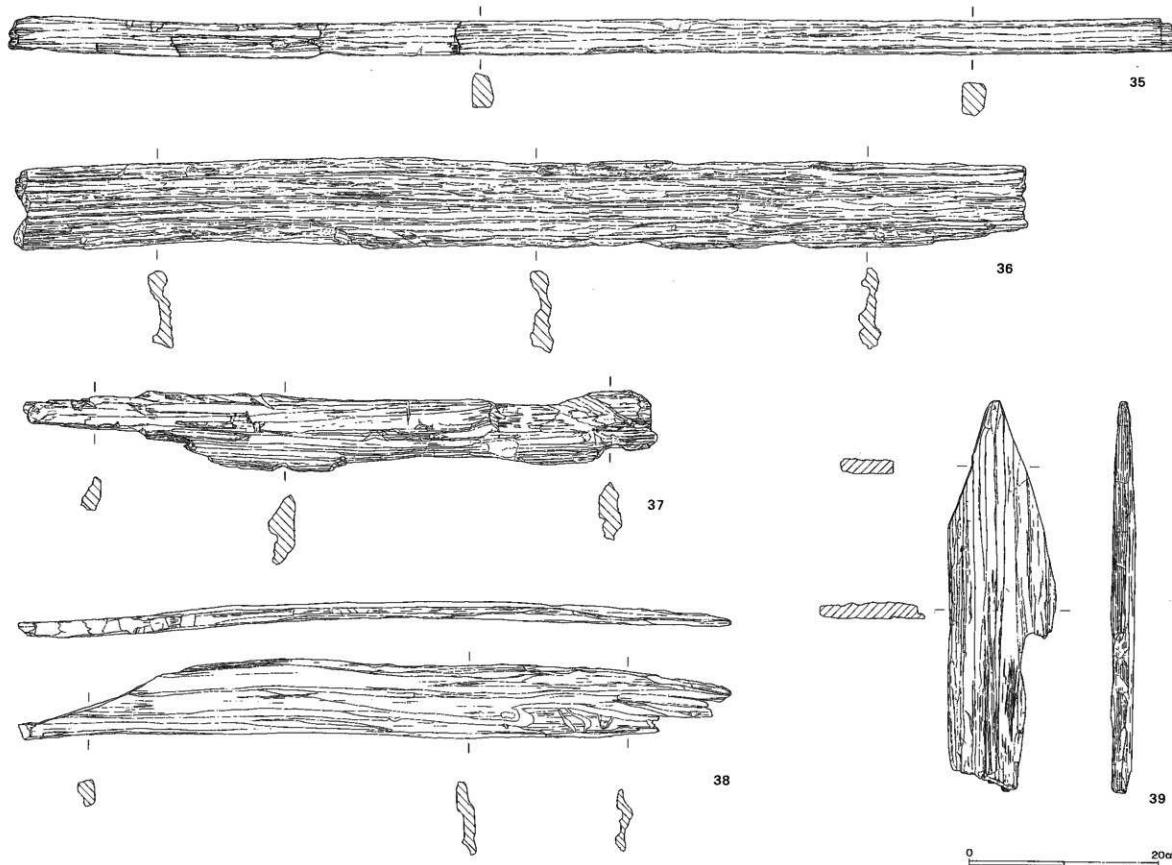
20は全面が丁寧な作りで、両端が相対するように斜めに削り落とされている。樹種はスギを用いているが、用途は不明である。

j. 部材（第84図、第90図）

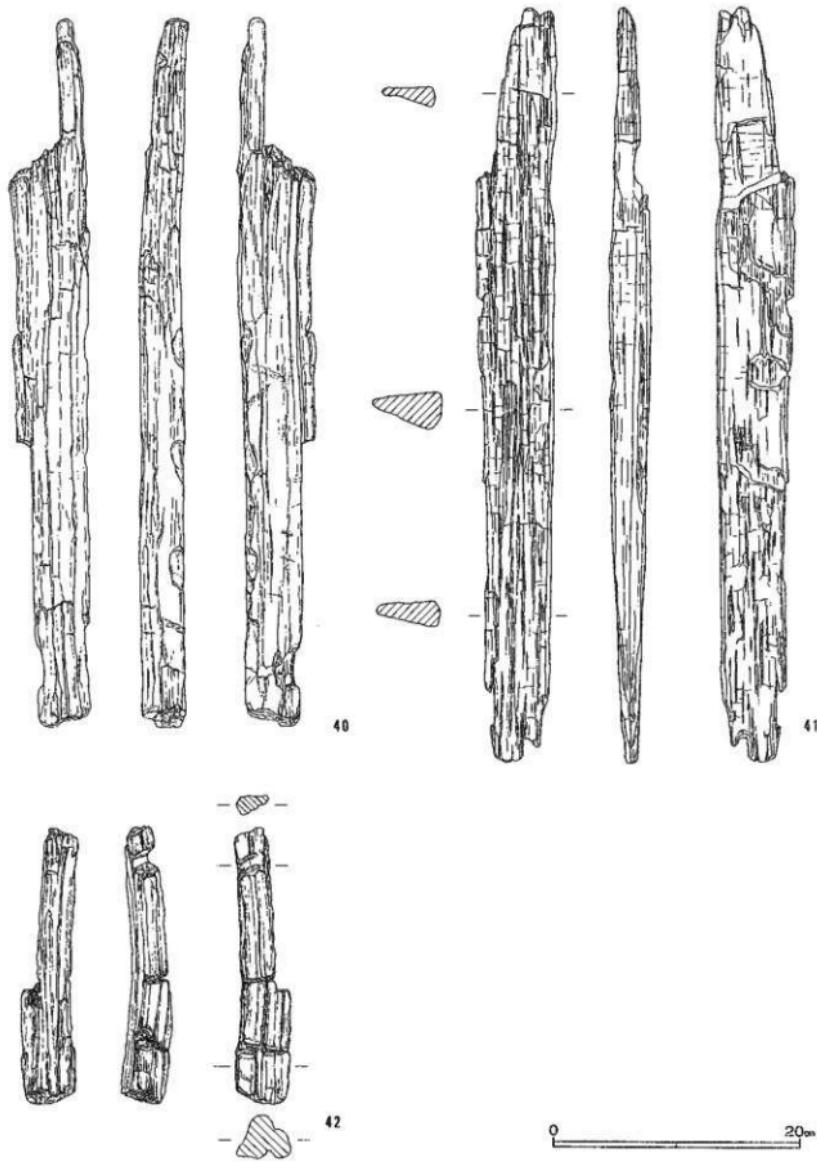
部材と考えられるものには、8、42がある。

8は自然木を利用した有頭棒で、その大部分には樹皮が残っている。細かく削り出されているが、あまり段差は有しない。このような有頭棒は組み合せの部材として使用されることが多い。樹種にはイスマキを用いている。

42は、組み合せの孔をもつ部材であろう。両端は欠損しているが、40と同一品の可能性もあり、同一品とすれば、長さ80cm以上のものとなる。樹種にはスギを用いている。



第89図 木製品実測図(7)



第90図 木製品実測図(8)

k. 四分枝木製品（第87図）

31は、4本に枝分れした樹を選び、枝木は樹皮を剥いだままの状態である。体部上面は細かくケズリ出されているが、体部下端には平坦面を作り出している。このような形状からは、傘状、あるいは筆状のものが想定されるが、蓋の笠骨にあたる可能性もある。樹種にはイヌガヤを用いている。（詳細については考察を参照）

l. 杖（第87図～第90図）

杖には、先端を鋭角に作り出すものと、切り離しただけの状態のものとが出土している。

先端を鋭角に作り出したものには、30、32、38、39などがあるが、39は両側面から三角形になるように作り出している。

切り離しただけの状態のものには、34、36、37、41などがあり、そのうち36は、長さ160cmを測る長物である。また、37には2ヵ所に穿孔されていた形跡が認められ、二次的に杖に転用されたものと考えられる。

これらの杖の中には、37にみられるように、建築部材などとして使用されていたものから、二次的に転用されたものも含んでいると考えられる。

m. その他の用途不明品（第85図、第86図）

21は、外面は樹皮を剥いだままの状態であるが、両端面は削られて平坦に作られている。欠損しているため、穿孔されていたかどうかは不明である。樹種にはアカマツを用いている。

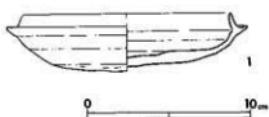
22は、現状では長さ61cmを測り、ナスピ形鋸の歯のように、僅かに中央部が湾曲している。片側は欠損しており、本来はもう少し長さがあったものであろう。樹種にはヒノキを用いているので、農耕具以外の用途を考えるべきかもしれない。

遺構外の出土遺物

遺構外の出土遺物は細片が多く、実測に堪えないが、西側部に堆積している灰オリーブ色粘質土中から、完形の須恵器坏身が出土している（第91図）。

口径12.8cm、器高3.5cmを測るもので、立ち上がりがやや内傾し、底部は丸みを帯びている。外面底部にはケズリが認められる。

このような坏身は、高広編年¹⁰ I B期の特徴を示しており、古墳時代後期、6世紀末～7世紀初頭のものであろう。



第91図 C区遺構外出土遺物実測図

出土遺物観察表（土器）

標示番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	船上	焼成	備考
			口径	底径	器高					
82-1	黒色粘土 甌	弥生土器 甌	17.8	9.8	35.3	口縁部／刻目文 外／頸部下ハケ、胴部から底部 ミガキ 内／頸部やや下からハケ	外／褐色 内／淡褐色	黒 1mm大の白色砂粒含む 金属粉含む	良好	
-2	黒色粘土 甌	弥生土器 甌	19.8	-	-	口縁部／格子文 外／頸部に捺頭压痕文、頸部 下ハケ、胴部列点文 内／頸部以下からハケ	淡褐色	黒 1mm大の白色砂粒多く含む	良好 82-4と同 一品	内面ケズリ 調査後ハケ
-3	黒色粘土 甌	弥生土器 甌or便	-	7.2	-	外／タテ方向ミガキ 内／タテ方向ミガキ	外／褐色 内／淡褐色	普通 1mm大の白色砂粒含む		底部付近に スヌ付着
-4	黒色粘土 甌	弥生土器 甌	-	7.8	-	外／タテ方向ミガキ 内／底部付近タテ方向ケズリ、 胴部ハケ	淡褐色	黒 1mm大の白色砂粒多く含む	良好 82-2と同 一品	
91-1	ReH-7地 粘質土 灰	須恵器 环身	12.8	-	3.5	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底部ケズリ	灰色	黒 1mm大の白色砂粒含む	良好	

出土遺物観察表（木製品）

標示番号	出土地点	時 期	製 品 名	樹 種	備 考
83-1	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	繖二連結未成品	アカガシ亞属	板目 連結部にV字状の切れ込み 柄装着部の隆起をケズリ出している
-2	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	疾銀二連結未成品	アカガシ亞属	板目 一部欠損 柄装着部の隆起をケズリ出している
-3	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	丸鍤(泥除)	アカガシ亞属	板目 約1/2を欠損
-4	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	大足?	スギ科スギ	板目 1ヵ所に穿孔あり 紐で飾った形跡あり
84-5	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	杓子形木製品 (未成品)	ケヤキ	板目 一部欠損
-6	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	碗	ヤマグワ	高台付 割り抜き
-7	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	燃えさし	ヒノキ科(サワラ?)	先端削り出す 一部焼けている
-8	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	有頭椎	イヌマキ	自然木を利用 樹皮が残る 先端を削って段を作り出す
84-9	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	納?	ウバメガシ	焼けてスヌ付着している 片端欠損
-10	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	用途不明	イヌマキ	片面は自然木の樹皮を剥いだ状態 先端削り出す
-11	黒色粘土 甌	弥生中期後葉	燃えさし	ヒノキ科(アヌナ ロ?)	先端削り出す 両端欠損

浜岡番号	出土地点	時 期	製 品 名	樹 种	備 考
84-12	黒色粘土	弥生中期後葉	燃えさし	スギ	
-13	黒色粘土	弥生中期後葉	柄?	スギ	柾目
-14	黒色粘土	弥生中期後葉	タモ棹	イタヤカエデ	自然木を利用 抉りあり
85-15	黒色粘土	弥生中期後葉	有孔板	スギ	追柾目 85-16と同一品 大孔2、小孔2を穿つ
-16	黒色粘土	弥生中期後葉	有孔板	スギ	追柾目 85-15と同一品 大孔2、小孔2を穿つ
-17	黒色粘土	弥生中期後葉	板状木製品	スギ	片側斜めに加工している
-18	黒色粘土	弥生中期後葉	部材の余り	スギ	追柾目
-19	黒色粘土	弥生中期後葉	部材の余り	スギ科(スギ)	板目 筋あり
-20	黒色粘土	弥生中期後葉	用途不明 (部材か?)	スギ科(スギ)	柾目 4面に丁寧な加工 両端斜めに加工
-21	黒色粘土	弥生中期後葉	用途不明	アカマツ	両端を平坦にカット
86-22	黒色粘土	弥生中期後葉	用途不明 (ナスピ形彫の歯 か?)	ヒノキ科(ヒノキ 属)	片端欠損
-23	黒色粘土	弥生中期後葉	板状木製品	ヒノキ科(ネズコ?)	柾目
-24	黒色粘土	弥生中期後葉	鋤か鉗	アカガシ亞属	板目 欠損している
-25	黒色粘土	弥生中期後葉	鋤の先端	アカガシ亞属	追柾目 先端斜めに加工
-26	黒色粘土	弥生中期後葉	鋤の先端	アカガシ亞属	柾目
-27	黒色粘土	弥生中期後葉	鋤の先端	アカガシ亞属	板目 一部焼けている 有孔あり
87-28	黒色粘土	弥生中期後葉	部材の余り	スギ	板目 一部焼けている ミカン割り材
-29	黒色粘土	弥生中期後葉	用途不明 (魚具類?)	アカガシ亞属	柾目 一部欠損
-30	黒色粘土	弥生中期後葉	杭	スギ科(スギ)	追柾目 先端削り出す
-31	黒色粘土	弥生中期後葉	四分枝木製品	イスガヤ科(イス ガヤ)	放射状に4つに分れた枝木を選び全体片面を削り出す、一方は平坦に作り出す 枝木は樹皮を剥いだ状態
-32	黒色粘土	弥生中期後葉	杭	スギ科(スギ)	柾目
88-33	黒色粘土	弥生中期後葉	製品→杭 (櫛か?)	スギ科(スギ)	板目 2つの穴を穿つ
88-34	黒色粘土	弥生中期後葉	杭 (部材の可能性あり)	ヒノキ科	板目 ミカン割り材

擇図番号	出土地点	時 期	製 品 名	樹 種	備 考
89-35	黒色粘土	弥生中期後葉	柄	スギ科(スギ)	極目 片端欠損 先端斜めにカット
-36	黒色粘土	弥生中期後葉	杭 (部材の可能性あり)	スギ科(スギ)	追征目
-37	黒色粘土	弥生中期後葉	製品・杭	スギ科(スギ)	極目 2ヶ所に穿孔されていた形跡あり
-38	黒色粘土	弥生中期後葉	杭	スギ科(スギ)	追征目 先端削り出す
89-39	黒色粘土	弥生中期後葉	杭	スギ科(スギ)	板目 先端削り出す
90-40	黒色粘土	弥生中期後葉	杭	スギ科(スギ)	追征目 ミカン割り材
-41	黒色粘土	弥生中期後葉	杭	スギ科(スギ)	板目 ミカン割り材
-42	黒色粘土	弥生中期後葉	部材	スギ科(スギ)	組合わせの孔あり

3. 小 結

C区では遺構は少なかったが、IH自然流路と考えられる地点から多量の木製品が出土した。これらの木製品は、農耕具、食器など用途も豊富であり、当方の弥生時代の集落生活を考えるうえで貴重な資料となった。

特に鍼二連続未成品にみられるように、製作途中のものも出土しており、受注してから最終的に加工するシステムが成立していたことが窺え、興味深い。また、木製品が多量に出土した地点からは、溝状遺構1条と杭が打ち込まれていたと考えられるピットが数穴検出され、木製品を貯蔵する施設として機能していた可能性がある。

出雲平野における弥生時代の木製品は、これまでに平田市源代遺跡⁽¹⁾で出土しているにすぎなかつたが、今回の調査により新たな資料が加わった。当該期の水田跡や畑跡は、いまのところ出雲平野では検出されていないが、これら農耕具類の出土を見る限り、生活の基盤として、盛んに農耕を行っていた様子が窺える。

また、IH自然流路はB区東側からしだいに落ち込みをみせ、木製品が出土した地点では、約2.3m以上の深さがあったと考えられる大規模なもので、地理的環境から、一時期には旧神戸川の本流となっていた可能性もある。そして、A区、B区ではほとんど認められなかった弥生時代中期後葉の土器や木製品が出土したことは、この周辺に弥生時代中期中葉から引き続いて集落が営まれていた様子が窺われる。

註

- (1) 『板付遺跡』『弥生文化の研究』 山崎 純男 1986年
- (2) 『上津印中遺跡・印中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』 兵庫県教育委員会 1995年
- (3) 『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ』 島根県教育委員会 1988年
- (4) 『那珂久平遺跡』 笛岡山教育委員会 1987年
- (5) 『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1984年
- (6) 『源代遺跡2 平田市埋蔵文化財調査報告書第5集』 平田市教育委員会 1995年

D



D区の調査

1. 調査の概要

D区は試掘調査によって遺構・遺物が確認された調査区のうち最も東側に位置し、JR第一高西踏切から郡是工場の北側までの幅約6m、長さ50m区間の約300m²を発掘調査の対象にしている。

調査区での層序は、山陰本線を敷設するにあたって盛土した部分（約1m）の下に、江戸時代後半期の遺物を包含する土層がある。標準的な層序では、上から茶褐色土、暗青灰色土、灰褐色土、暗褐色土、暗褐色粘質土、暗青灰色粘質土、暗青褐色粘質土、黒灰色粘質土と続き、その下は灰白色粘質土になっている。茶褐色土は、表土掘削時にほとんど耕土しているため、土層断面では認められず、精査時の上層は暗青灰色土ないし灰褐色土になっている。この層は、近世の畝状遺構や道状遺構のベースとなる層で、やや厚く広がりをもっている。暗褐色土には一部中世の遺物もふくまれるが、近世の包含層である。その下の暗褐色粘質土はかなり締まった層で墨書き木札のほとんどはこの層から出土している。

漸移層である暗青灰色粘質土の下の暗青褐色粘質土は強粘性でやや軟らかいが、石敷遺構がこの層にあり、土質質土器のかなり磨滅した底部など、ごく少量の遺物が出土しているに過ぎない。この下に続く黒灰色粘質土、灰白色粘質土からは全く遺物が認められないので、近世のある時期に道路ができてから生活、生産の場になったことが推測される。

検出した遺構は、近世以降の比較的新しい時期のもので、弥生土器が若干包含層に含まれてはいるものの遺構に伴うものではなく、中世以前の遺構は皆無であった。遺構は少なく、近世の石敷遺構のほか、近世後半の道状遺構、畝状遺構が認められたに過ぎない。

石敷遺構はD区のなかでは最も古い時期の遺構で、2~5cmの小砾を幅約3m、長さ11mにわたって敷きつめており、調査区外へ伸びている。直上から笄や馬齒が出土していることからみても、道路であった可能性が高い。また、その0.4m上からは石敷遺構の一部に重なった状態で、同方向に近世後半の道状遺構が伸びている。3.4m幅で、長さ11mにわたって検出しているが、両端が調査区外に伸びている。道状遺構は、かなり堅敏に踏み固められており、近世道路とみて間違はないと考えられる。調査区を斜めに横切る近世道路の東側の北半分には、道路の側溝らしき溝状遺構も存在している。この遺構の西側には、畝状遺構がD区の西端まで広がっている。畝幅は0.5mでほぼ南北方向に伸びているが、それに直交する畦道もみられる。

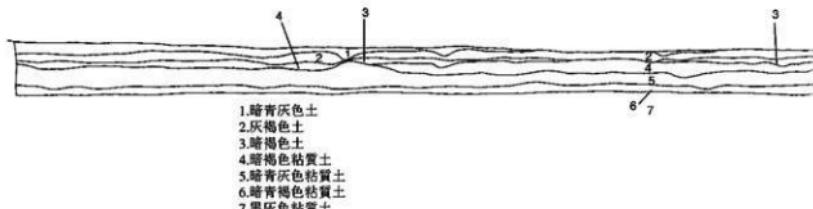
遺物が出土した層は暗青褐色粘質土から上の層で、弥生時代以降の遺物が出土しているが、最も多い遺物は近世陶磁器である。弥生土器は量的に少なく10点近く出土しているが、遺構に伴うものではない。古代の土器は全く出土しておらず、中世の遺物が少量出土している他は、ほとんど全てが近世陶磁器である。中世遺物のなかには、青磁（器形不明）も含まれている。

注目すべき遺物としては、墨書き木札がある。近世木簡と考えられ、5点確認されている。調査区のなかでも西寄りのC3付近からその多くが出土している。判読できないものもあるが、物品の荷札として、貴重な文字資料といえる。

C1
7.00m

C2

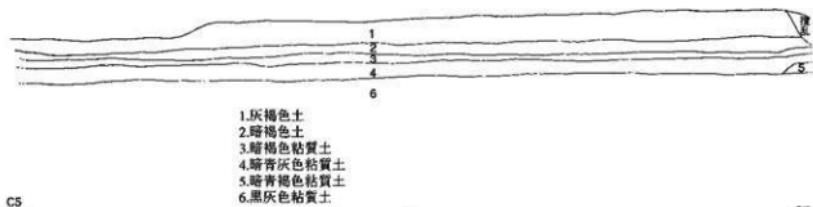
C3



C3
7.00m

C4

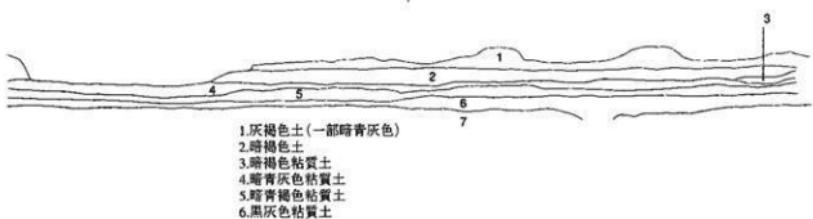
C5



C5
7.00m

C6

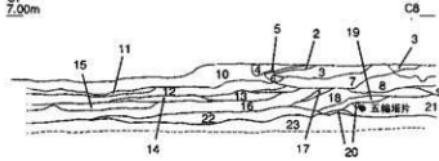
C7



C7
7.00m

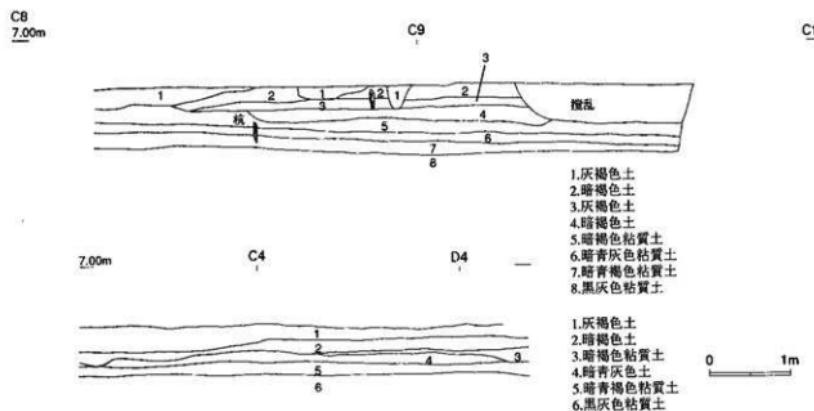
C8

- 1.淡黄灰色土
- 13.暗褐色土
- 2.暗青灰色土
- 14.暗褐色土
- 3.淡青灰色土
- 15.暗褐色粘质土
- 4.淡黄褐色土
- 16.暗青灰色粘质土
- 5.淡灰白色土
- 17.暗青灰色粘质土
- 6.暗青灰色土
- 18.暗青灰色粘质土
- 7.淡褐色粘质土
- 19.暗青灰色粘质土
- 8.淡黄灰色土
- 20.暗褐色土
- 9.淡灰色土
- 21.暗青灰色粘质土
- 10.灰褐色土(一部暗青灰色)
- 22.暗青褐色粘质土
- 11.暗褐色土
- 23.暗青褐色粘质土



0 1m

第92図 土層断面実測図 (C 1 - C 8)



第93図 土層断面実測図 (C 8 - C 10、C 4 南北)

2. 遺構と遺物

D区の土層は、A～C区と異なり、下層に粘質土が卓越している。遺物からみても、弥生土器も包含してはいるものの、大半を近世陶磁器が占めていることからみても、高燥で居住に適したA・B区と地形的要因が異なり開発が遅れている。

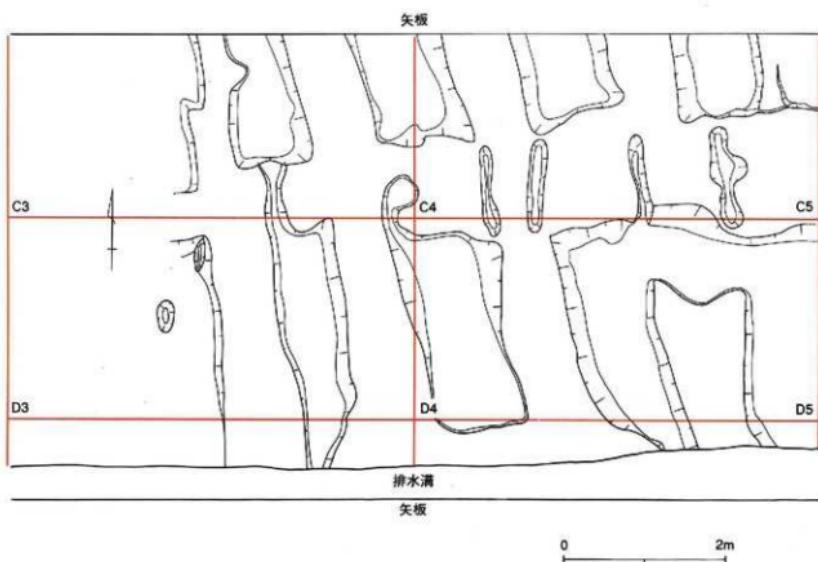
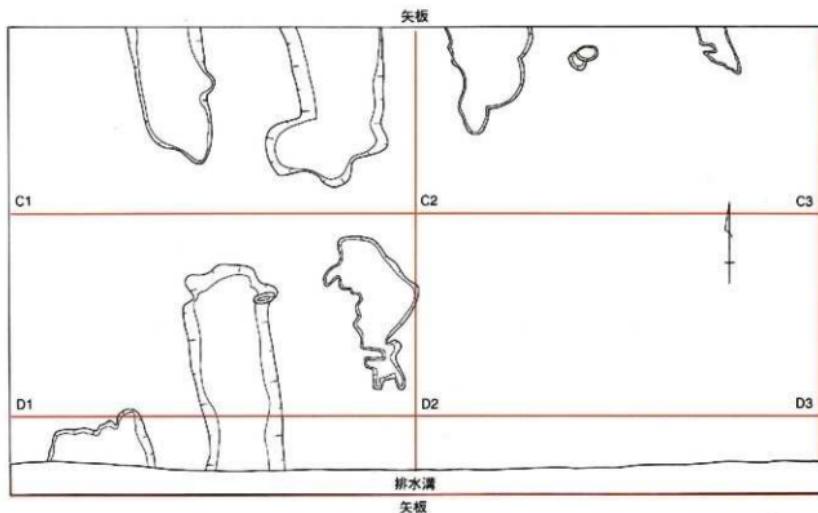
D区の基本層序は、山陰本線敷設時の盛土の下に、灰褐色土、暗褐色土、暗褐色粘質土、暗青灰色粘質土、暗青褐色粘質土があり、その下に無遺物層の黒灰色粘質土、灰白色粘質土が続いている。層的にみると、C 7付近で近世後半の道状遺構があるため複雑になっているほかは単純な層相を示している。

遺構は地形的な制約もあり極めて少なく、時代的にみても近世になってはじめて確認できる。遺構としては、近世の石敷遺構のほか、近世後半以降の道状遺構、畝状遺構を検出している。

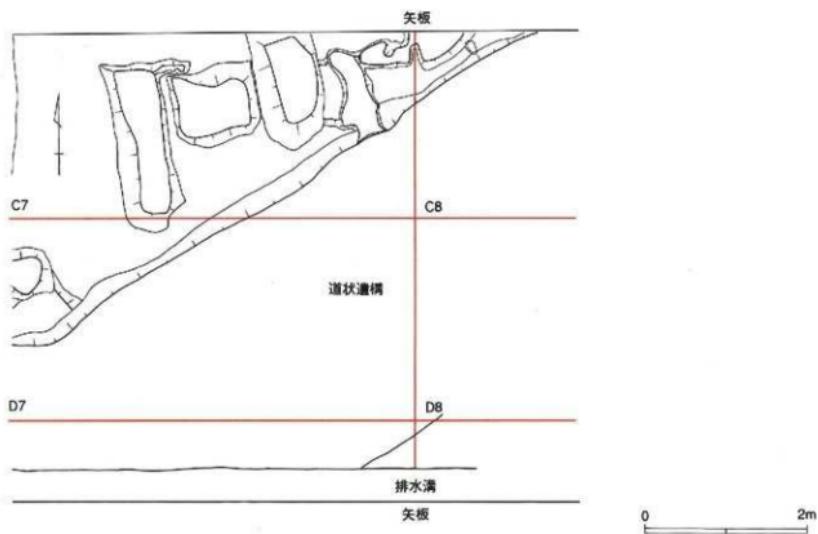
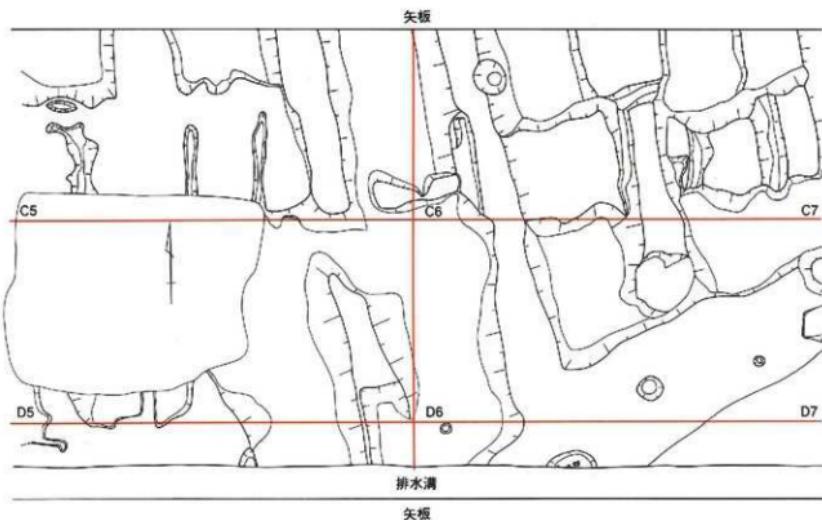
畝状遺構

D区のはば全面にわたってみられる遺構は畝状遺構である。C 1 - C 8 にわたって広く分布し、近世道路の西側に35m以上続いている。道状遺構の東側には明瞭な遺構は認められず、溝状遺構が存在するのみである。

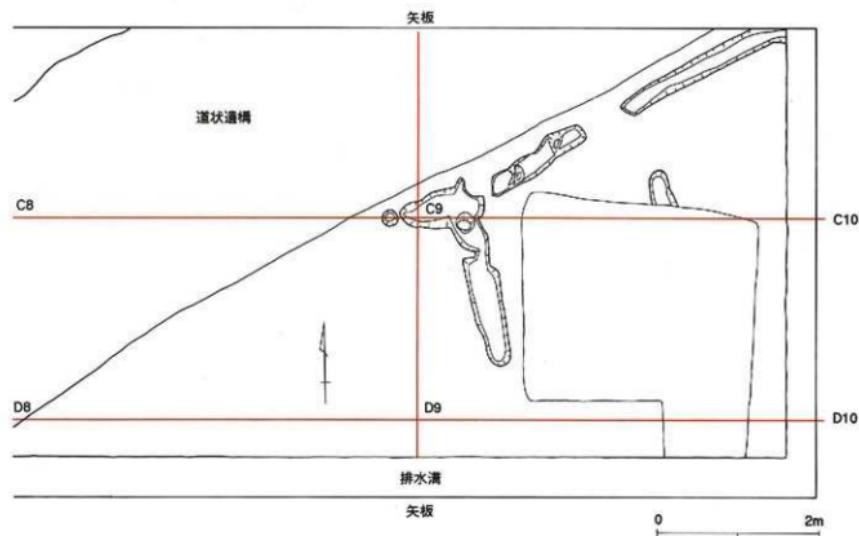
畝状遺構は、やや砂質の暗青灰色土や灰褐色土をベースにした遺構で、高畝は高さ約10cm、0.6~0.8mの幅があり、ほぼ南北方向に2m間隔で規則的に認められた。南北方向の畝の長さは調査区外になるため知ることができない。畝状遺構のなかには、ほぼ東西方向に畦畔状の1m幅の道が伸びており、道の東端は近世後半期の道状遺構まで続いている。道状遺構の東側には、畝状遺構も畦畔状の道も見当らないので、西側にのみ畝状遺構が広がっていたと考えられる。また、道状遺構と畝状遺構の方向が異なっていることからみて、畠地であったところに新たに道がついたものと考えられ、畠地は近世後半から近代まで同じような環境であったことが推測される。



第94図 突状遺構実測図 (C 1 - C 5)



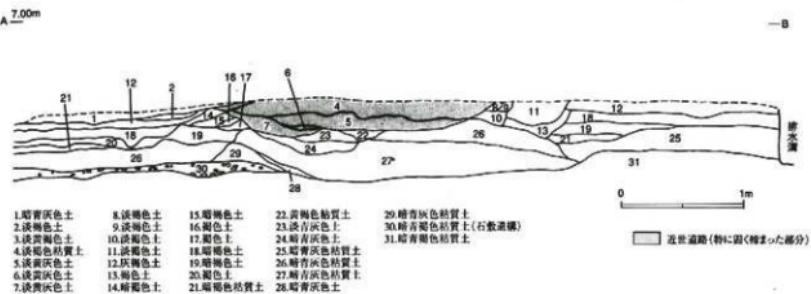
第95図 畠状造構（C 5 - C 8）及び道状造構実測図



第96図 道状遺構

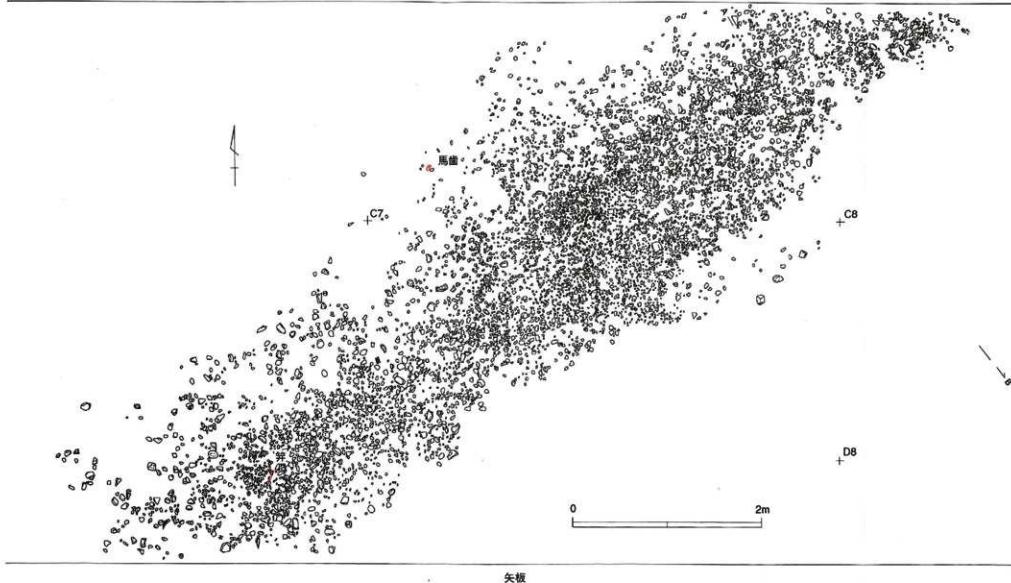
道状遺構

調査区の東端で検出した遺構である。畠状遺構の東端で調査区を斜めに横切っているが、畠状遺構とほぼ同時期の遺構であり、おそらく山陰本線が敷設される明治末期頃まで道路として使われていたものと考えられる。道路幅は約3.4mで、長さ11mにわたって検出しているが、両端は調査区外に伸びている。路面は踏み固められ、かなり堅緻で、土層断面でみても20~30cmは固く締まっていた。道路の東側の一部には側溝らしき溝も確認されている。道状遺構の直上からの明確な出土遺物はないが、層位的にみて近世後半の道路と考えられる。道路の走向を北方へ延長すると、東から西へ向かう近世の石州街道に繋がることから、この付近で南へ折れ、現在の郡是工場内に伸びる石州街道の往還道と

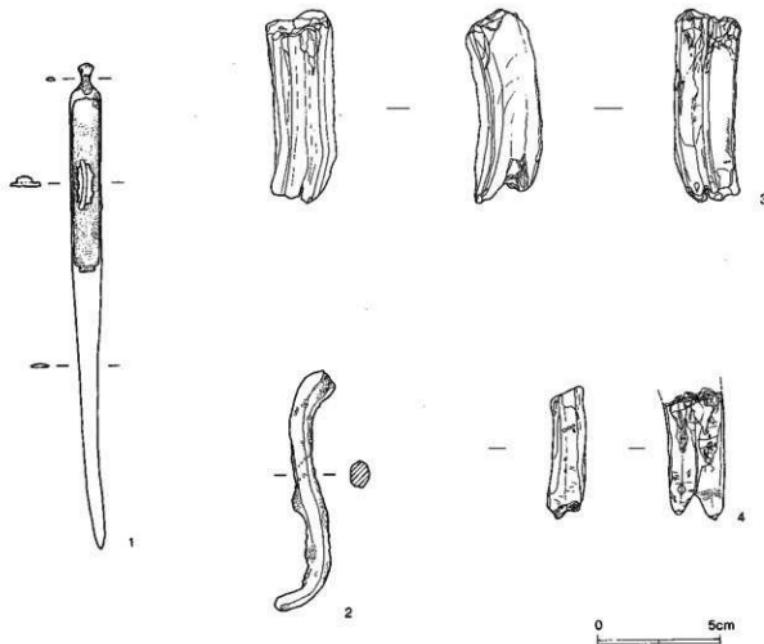


第97図 道状遺構断面実測図

矢板



第98図 石敷造構実測図



第99図 石敷遺構出土遺物実測図

して敷設された道の可能性もある。調査地の南西付近は比較的最近まで池などの湿地がかなり残っていたといわれており、石州街道が高燥な微高地である旧自然堤防を選び、調査地付近から南へ折れていることが、そのことをよく示している。

石敷遺構

D区では暗青褐色粘質土中にある石敷遺構が最も古い遺構で、C6-C8にかけて調査区を北東から南西に走り、両端とも調査区外に伸びている。10cmを超える礫もなくはないが、ほとんどが2~5cmの小礫で、幅3m、長さ11mにわたって隙間なく敷きつめているが、層厚は10cm程度であり厚くはない。石敷遺構の上面のレベルは標高6.8mとやや低く、またその下層の暗青褐色粘質土がやや軟らかいため、小礫を敷いて路面の沈下を防ぎ歩きやすくしたものと考えられる。この石敷遺構の直上からは斧と馬齒が出土しており、その点からみても石敷遺構が道路として使われていた可能性は高い。

また、石敷遺構は、約0.4m上層で同方向の走向をもつ道状遺構と東側が約1m平面的に重なっている。このことは、3m幅の石敷の道路を踏襲してほぼ同じ位置に近世後半期の道路が新たに敷設されたことを示しており、江戸期における交通網を知る上で貴重な資料を提供するものといえる。

遺構に伴わない出土遺物

墨書き木札

D区から出土した遺物で特筆すべきものに墨書き木札（木筒）がある。天神遺跡ではD区からのみ出土しており、今調査で5点確認している。

墨書き木札はC3付近から4点（101-1・3・4・5）が出土したほか、C7-C8のセクションベルトからも1点（101-2）出土している。4点はかなり縮まった暗褐色粘質土中から出土し、残りの1点はその上層の暗褐色土から出土している。この両層は層位的にみていずれも石敷遺構と近世後半期の道状遺構との間層であり、近世の木筒である。

墨書き木札のうち、形態的に良く似ているのが1と4で、上端から8mm下に両側面からの切り込みがあり、下端は直線的である。しかし、木質はやや異なり、1が表面が平滑なのに比べ4はやや粗く木目が残る。1は、長さ12.6cm、幅3cmで下端にいくにしたがってやすぼまる形態をもつ。4は、ほぼ直線状の側線をもつ長さ12.1cm、幅2.8cmの木筒である。いずれの木筒の両面にも墨書きが認められる。

2は、上端から1.5cmの位置に両側面からの切り込みがあり、下端は長く鋭く尖らせており。厚さが3mmと薄く、表面も粗い。長さは15.1cm、幅2.7cmで、出土木筒の中では最も大きいが、表面の劣化がひどく判読できない。

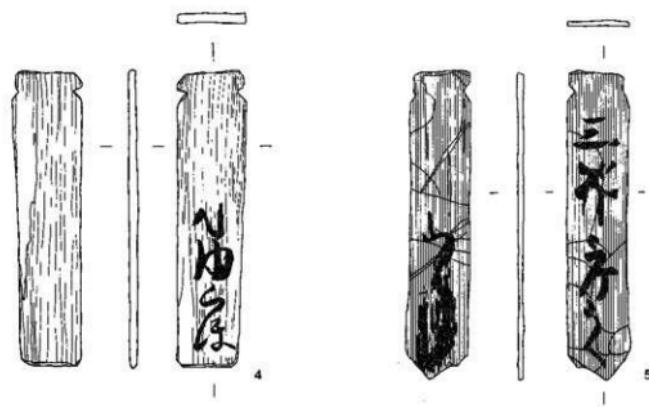
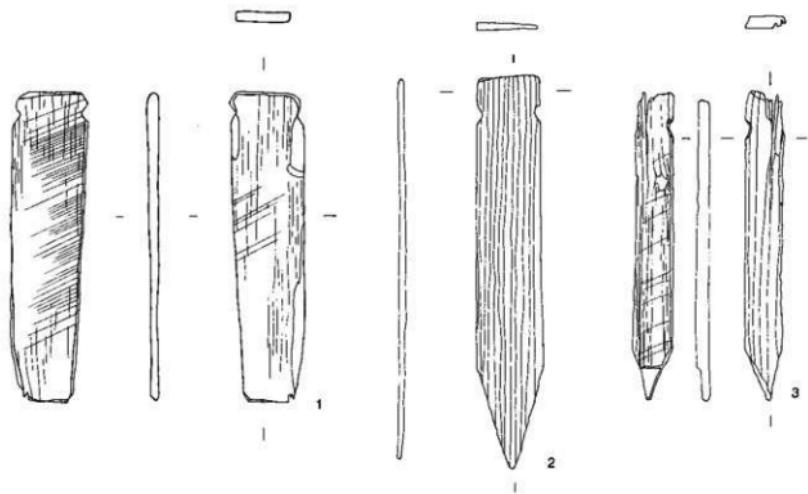
3は、1のすぐ近く（20cm北側）で出土した木筒である。今回出土した木筒の中では最も小さい。タテ方向に割れた半欠品であるが、長さ（残存長）は12.3cmを測る。残存上端から1.3cmの位置に切り込みがあるが、もう一方の側面からの切り込みは欠失し残っていない。下端は鋭く尖らせており、片面に段差がある。表面には墨痕があるが判読できない。裏面は全面黒によって塗りつぶされている。

5は、1の北約2mで出土した木筒である。二つに割れ、30cm離れた状態で出土した。上端から1cmに両側面からの切り込みがみられ、下端は小さく尖らせている。長さは12.6cmあるが、厚さは2mmで最も薄い。両面に墨書きが残り、片面はかなり明瞭である。

これらの墨書き木札（木筒）は、物品につける荷札とみられるが、遺構に伴うものではないものの、位置的にみて近世道路の近くから出土し、また、そこが石州街道からの分岐点であることを考えあわせれば、物資の流通を考えるうえで興味深い。

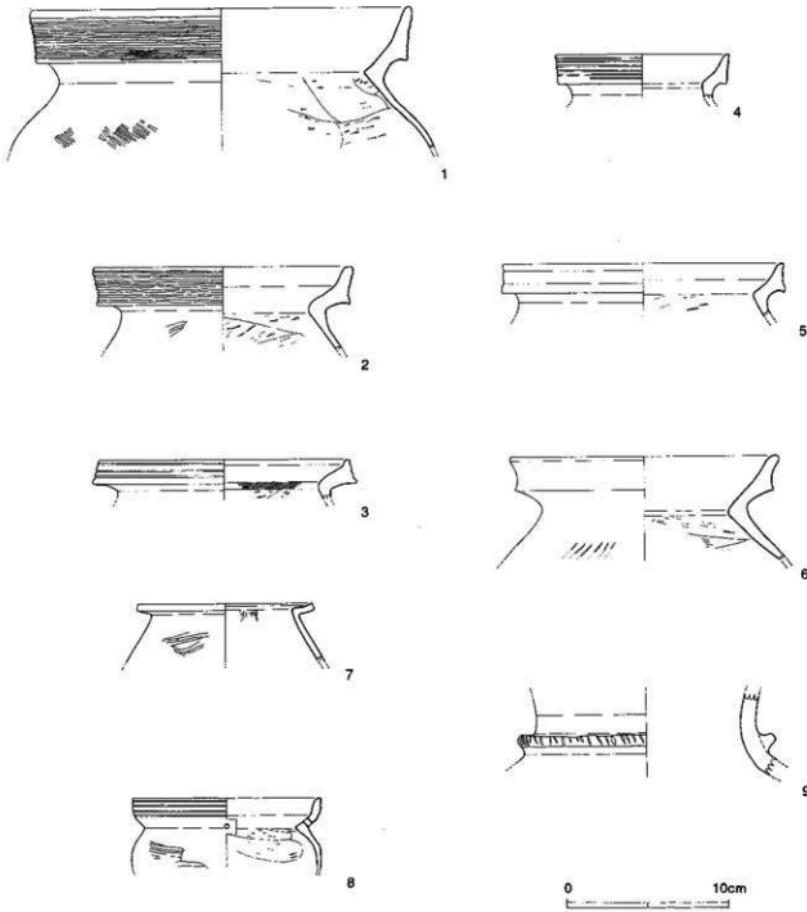


第100図 墨書き木札出土状況実測図

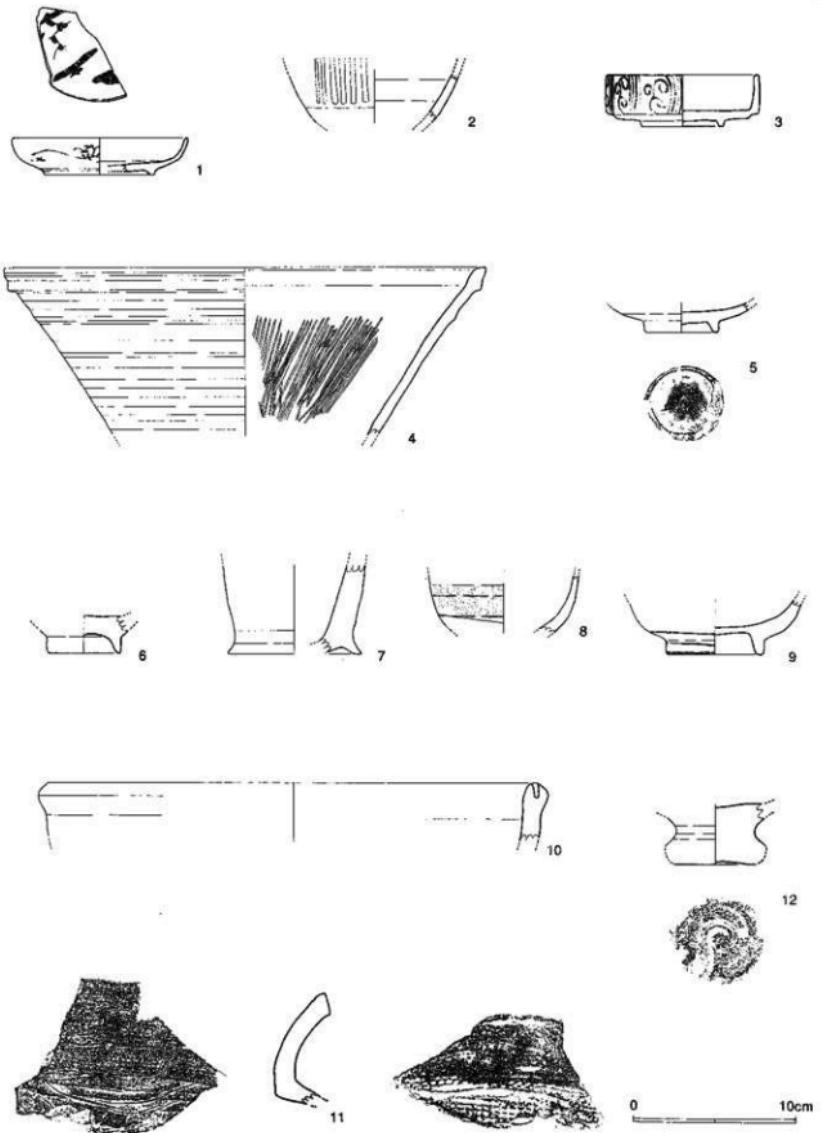


0 5cm

第101図 墓書木札実測図



第102図 D区出土土器実測図(1)



第103図 D区出土土器実測図(2)

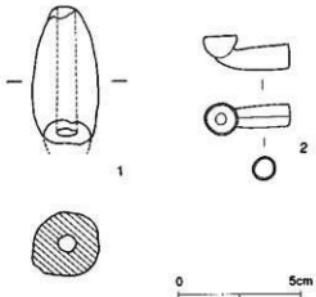
土器類

出土土器は弥生時代から近世までのものが出土しているが、そのほとんどは近世陶磁器である。弥生土器は10点近く出土しているが、すべて近世の包含層に含まれるものである。古代の土器は全く認められず、中世についても僅かしか認められない。

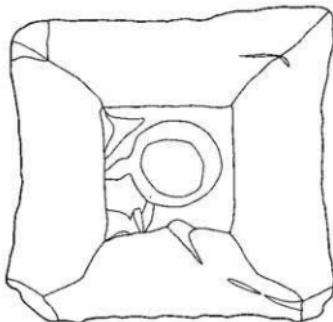
弥生土器は、後期の甕などが出土している。いずれも小さな破片で、全体の形を窺えるものはない。1～6は甕で、いずれも複合口縁を有する。1は、出土した土器では最も大形品で、口径23cmの甕の口縁部である。口縁部外面に貝殻腹縁による擬凹線文をめぐらし、内面頸部以下にケズリがなされている。2は、1をそのまま小ぶりにした口径16cmの甕である。3は、これらの甕の中では最も古い時期のもので、口縁外面に凹線文を施し、内面頸部以下にケズリを施す。4は、小形の甕で、口縁外面に擬凹線文、内面頸部以下にケズリを有する。5は、緩い凹線文をめぐらし、内面頸部以下にケズリを施す。6は、体部外面に列点文を施し、内面頸部以下にケズリを施している。7は、単純口縁の甕であるが、体部外面にヨコ方向のミガキを施した類例の少ない土器で撒入品の可能性もある。8は、鉢と考えられる土器で、口縁外面はヘラ描直線文を施し、体部外面はヨコ方向のミガキで仕上げている。また、頸部には貫通する径3mmの小孔を穿っている。9は、頸部に刻目を施した突蒂を貼付けた壺のようであるが、全体の形は不明である。

陶磁器は、灰褐色土から暗青褐色粘質土のいずれの層からも出土している。

中世土器としては、2の青磁、11の瓦質土器、12の台付土師器がある。青磁は1点のみ出土し、2は器形は不明だが体部の破片である。11は、大形の甕と考えられ、口縁部片である。内外面とも暗灰色を呈し、頸部以下に格子状のタタキがある。12は、土師器台付土器の底部であるが、器形は不明である。



第104図 その他の出土遺物(1)



第105図 その他の出土遺物(2)

近世陶磁器のうち、1は、肥前系磁器の染付で、内外面に文様がみられる。口径10.7cmの皿で、底径6.6cmの低く細い高台がついている。3は、小鉢であるが、灰褐色土から出土しており、明治期以降の可能性もある。4は、肥前系のすり鉢で、暗褐色土から出土している。外面口縁下に三角状の突起を貼付けている。内面には、6条を1単位とするすり目をかなり密に施している。5は、产地不詳だが、高台付の皿と考えられる。6は、近世後半の肥前系陶器の碗である。7は須恵器であるが器形は不明である。8は、肥前系陶器の天目茶碗で江戸中期以降のものである。9は、江戸末期の伊万里の陶胎染付である。9は、器形は不明だが、玉縁状の口縁の端部に上から差し込むための径0.5cm、深さ1.5cmの穴が開いている。

その他の遺物

墨書き木札、土器類のほかには、土錐、煙管、五輪塔が出土している。土錐は残存長5.5cm（復元長8cm）、幅2.6cmの中形品で、中央に0.8cmの孔が開いている。C 8の暗青灰色粘質土から出土している。煙管は、真鍮製で、C 1の暗褐色土中から出土している。五輪塔は火輪のみが発見されているが、近世後半の道状遺構の下層の暗青灰色粘質土の直上から出土したものである。

3. 小 結

D区は、天神遺跡の東端に位置している。天神遺跡の中心は弥生時代の遺構であり、天満宮付近には奈良時代の遺構、また天満宮の北側には中世の遺構があるなど、時代によって遺構の分布地域を異にするが、近世の遺構はあまり知られていない。D区の遺構は近世以降のみであり、中世以前の遺構が見当らない点が特色といえる。

その遺構にしても、道状遺構は点を結ぶものでしかないが、付近から物品の荷札としての墨書き木札（木簡）が確認されたことは、物資の流通があり、この付近に集荷センター的な施設があったことを窺わせる。

江戸時代の「国都全図」によると、石州街道から分岐した往還道がまっすぐそのまま西に向かっていることからみて、調査で検出した近世後半の道状遺構はこの道にあたり、石敷遺構はその前段階の原形と考えられる。また、近世の郷藏の位置は天神の西端にあたり、出土地とは少し離れているので、直接的な係わりを求めるることは難しく、むしろ街道の分岐点であることに深く関係があると考えられる。

D区の調査では、近世道路や類例の少ない近世木簡が発見され、近世の物資流通や交通を考えるうえで貴重な資料を提供するものといえる。

出土遺物観察表

番号	種類・形態	出土地点	法量(cm)	形態・調整等の特徴
99-1	斧	石敷遺構直上(C 6)	長さ 20.2	先端は細く尖っている。 文様貼付。
- 2	鉄製品	石敷遺構直上(B 7)		
- 3	馬齒	石敷遺構直上(B 7)	長さ 7.5	
- 4	馬齒	石敷遺構直上(B 7)	長さ 5.0	
101-1	墨書き木札(木簡)	C 3 暗褐色粘質土	長さ 12.6 幅 3.0	表面平滑。両面墨書き。 上端付近に両側面から切り込み。 下端は直線状。
- 2	墨書き木札(木簡)	C 7-C 8 セクションベルト 暗褐色土	長さ 15.1 幅 2.7	上端付近に両側面から切り込み。 下端は鋭く尖る。
- 3	墨書き木札(木簡)	C 3 暗褐色粘質土	長さ(12.3)	半欠品。上端付近に切り込み。 (片面のみ確認) 墨痕あり。裏面は全墨。
- 4	墨書き木札(木簡)	B 3 暗褐色粘質土	長さ 12.1 幅 2.8	両面墨書き。下端は直線状。
- 5	墨書き木札(木簡)	B 3 暗褐色粘質土	長さ 12.6 幅 2.4	二分割で出土。 上端付近に両側面から切り込み。 下端は小さく尖る。 背面に墨痕。
102-1	弥生土器 瓢	C 6 暗褐色土	口径 23.0	口縁外面は貝殻腹縁による擬凹線文。外面肩部は貝殻腹縁による簾状文。 内面頸部以下にケズリ。
- 2	弥生土器 瓢	C 6	口径 16.0	口縁外面は貝殻腹縁による擬凹線文。 内面頸部以下にケズリ。
- 3	弥生土器 瓢	C 6 暗褐色土	口径 15.4	口縁外面に四線文。 内面頸部以下にケズリ。
- 4	弥生土器 瓢	C 6 暗褐色土	口径 10.6	小形。口縁外面は貝殻腹縁による擬凹線文。 内面頸部以下にケズリ。
- 5	弥生土器 瓢	B 4 暗褐色土	口径 17.2	口縁外面に四線文。 内面頸部以下にケズリ。
- 6	弥生土器 瓢	C 6	口径 16.4	体部外面に列点文。 頸部以下にケズリ。
- 7	弥生土器 瓢	C 2 暗褐色土	口径 10.8	単純口縁。体部外面にヨコ方向にミガキ。細く短い端部。 搬入品(?)
- 8	弥生土器 筒	C 6 暗褐色土	口径 11.6	口縁部にヘラ描き直線文。 内外面にヨコ方向のミガキ。 頸部に貫通する小孔あり。 搬入品(?)
- 9	弥生土器 壺(?)	C 6 暗褐色土		外面頸部に一条の刻日突帯。 類例少ない。
103-1	肥前系磁器 染付皿	第3トレント	口径 10.7 底径 6.6	内外面に文様を施す。
- 2	青磁	B 5 暗褐色土		

番号	種類・形態	出土地点	法量(cm)	形態・調整等の特徴
103-3	小鉢	灰褐色土	口径9.4 底径5.0	低高台が付く。 体部に唐草様文様あり。
-4	肥前系陶器 すり鉢	C 3 暗褐色土	口径29.8	外面口縁下に三角状突帯を貼付。 内面のすり目は6条1単位。焼成極めて堅緻。
-5	皿	B 4	底径4.8	高台付。外面底部付近は施釉なし。内面施釉。
-6	肥前系陶器 碗	C 6 暗青灰色粘質土	底径4.4	内外面施釉。
-7	須恵器	表採	底径8.2	低高台付。
-8	肥前系陶器 天目茶碗	C 6 暗褐色土		
-9	伊万里 陶胎染付 碗	C 4	底径6.0	淡緑色施釉。
-10	陶器	C 9 暗褐色土		下縁状の口縁端部に径0.5cmの 小孔あり。
-11	瓦質土器 壺	C 7 暗褐色土		外面頸部付近に格子目文。
-12	土師器		底径5.0	台付上器。
104-1	土鍤	C 8 暗青灰色粘質土	残存長5.5 幅 2.6	中央に0.8cmの孔のある管状上 鍤。
-2	煙管	C 1 暗褐色土		真鍮製。
105-1	五輪塔	B 8 暗青灰色粘質土		火輪のみ。

総 括

今回発掘調査を実施した地点は、天神遺跡の北東部にある。

A区では、弥生時代中期中葉から近世に至るまでの遺構を多数検出した。これらの遺構の時期はおよそⅢ期に大別できる。中でも、弥生時代中期中葉頃の遺構である大溝1、2は、幅が約6mもある大規模なもので、集落を周囲する環濠の可能性がある。

B区においても、弥生時代中期中葉から近世にかけての遺構を多数検出している。他区間に比較して遺構の残存状態も良好で、遺物も多量に出土している。

特に、弥生時代終末期頃の遺構と考えられるSD06からは、遺物が多量に出土している。器種もバラエティに富んでおり、その中には搬入品も多く認められることから、当該期の出雲平野における集落が他地域と盛んに交流を行っていた様子が窺える。また、これまでの天神遺跡の発掘調査では、当該期の遺物はほとんど確認されていなかったことから、天神遺跡の時期的変遷を考えるうえでも貴重な資料となった。

C区では、旧自然流路で、弥生時代には低湿地となっていたと考えられる地点で多量の木製品が出土している。これらは、共伴する土器から弥生時代中期後葉のものと考えられ、当該期における木製品としては、市内でも初めての発見となっている。これら木製品の中には、未完成のものもふくまれており、溝やウッドサークルの中で保管していた可能性もある。

D区では、弥生時代、古墳時代の遺物は少ないが、石敷遺構や近世の道状遺構などが検出された。

近世の道状遺構は、石州街道から分岐した往還道と考えられ、付近では墨書き木札が出土していることから、この付近に集荷センター的な施設があったことを窺わせる。

以上のように、天神遺跡が弥生時代中期中葉から現代に至るまで、引き続いて生活が営まれている大複合集落遺跡であることを再認識する結果が得られた。

今回の発掘調査によって得られた資料から、この地域における様相をまとめておく。この地域には、弥生時代中期中葉頃に人々が定住し始めたことは明らかである。それは中期後葉頃まで続くが、後期には一旦、生活区域としては利用されなくなったようである。これまでの調査では、この地域の南方で後期の遺構が検出されていることから、後期にはやや南方に居住域があった可能性が強い。

そして、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて、再び生活の場として利用されていたようである。しかしながら、それも長くは続かず、古墳時代中期になると遺物、遺構とも検出されず、利用されなくなっている。これは、出雲平野の集落遺跡に認められる傾向であるが、この時期に何か社会的な大変化が生じたことが考えられよう。

中・近世には、小規模ながら遺構や遺物が検出されており、人々が生活していた様子が窺える。また、D区で検出された道状遺構は、類例の少ない遺構であり、江戸期の様子を知り得る新たな知見であった。

この地域は、以上のような歴史的背景をもちらながら現在に至っていると言えよう。

考 察

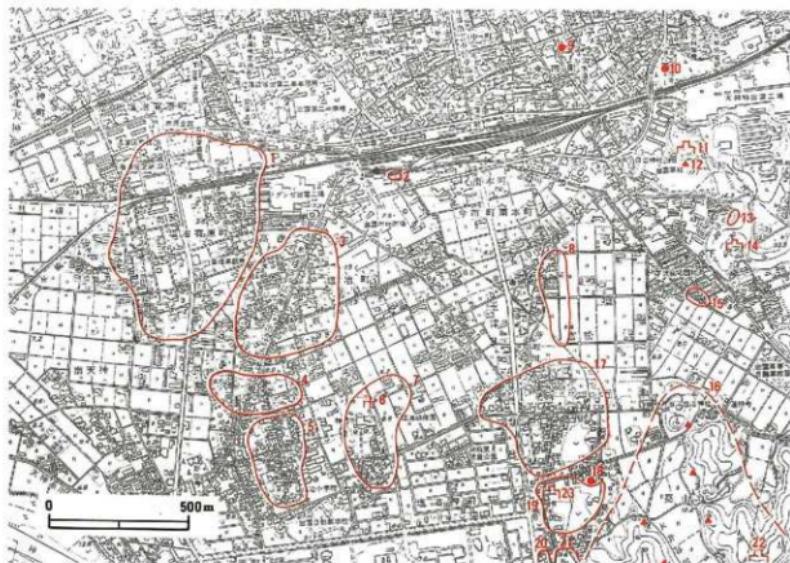
天神遺跡出土の四分枝木製品について

1. はじめに

出雲市天神遺跡は、出雲平野の中央南部に位置し、弥生時代中期から近世に至るまでの複合集落遺跡として知られている。遺跡は沖積低地との比高1~2mの高燥な自然堤防上にあり、天神天満宮付近を中心として東西450m、南北600m以上の広範囲にわたる（第1図）。

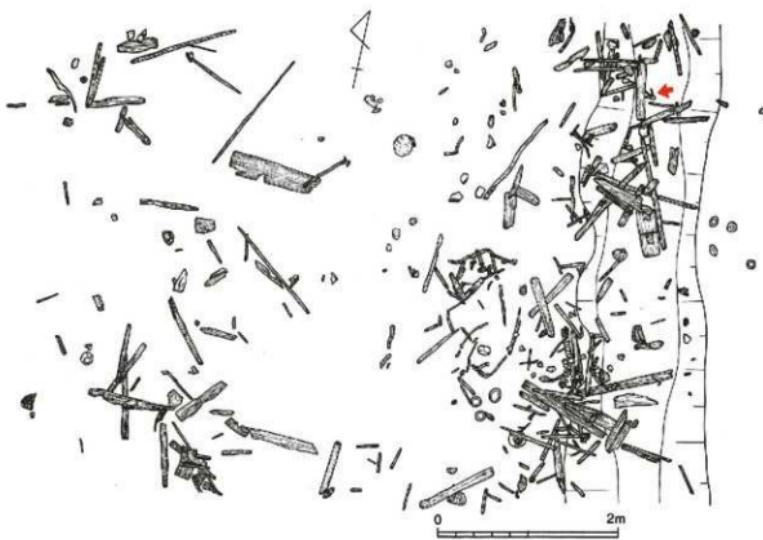
これまでの発掘調査は、昭和47年から平成6年に至るまで、7度実施されている。いずれの調査においても多くの遺構や遺物を検出しているが、出雲市駅付近連続立体交差事業に伴う発掘調査においては、弥生時代から古墳時代初頭の環濠と考えられる大溝や、谷状に落ち込んだ低地から多量の木製品が出土したことなど、多大な成果が得られた。

ここに紹介する四分枝木製品は、平成6年度の発掘調査において、農具や食器などと共に出土したものである。県内では報告例のない資料であり、全国的には近年の資料増加に伴い検討されたようになった蓋の笠骨としての用途が考えられないかということで、ここに資料として報告する次第である。



第106図 天神遺跡周辺の遺跡

1. 天神遺跡 2. 善行寺遺跡 3. 高西遺跡 4. 古原遺跡 5. 塚治小学校付近遺跡 6. 神門寺境内施塗 7. 神門寺付近遺跡
8. 角舟遺跡 9. 塚山古墳 10. 今市大奈古墳 11. 平家丸城跡 12. 久歎置構築墓 13. 下沢遺跡 14. 白山城跡
15. 下沢会館周辺遺跡 16. 上塙治横穴墓群 17. 宮松遺跡 18. 上塙治築山古墳 19. 鶴山遺跡 20. 寿昌寺西遺跡 21. 寿昌寺遺跡
22. 大井谷城跡 23. 佐原庄跡



第107図 遺物出土状況実測図

2. 出土状況

四分枝木製品が出土した地点は、弥生時代から古墳時代初頭にかけての大溝を検出した東側にあたり、谷状に落ち込んだ低地となっている。木製品が出土した範囲は、南北6m以上、東西約8mで、古墳時代の遺物包含層である褐色灰色土の下面、灰黃褐色砂層・黒色粘土中である（第2図）。これらの木製品は共に出土した土器から、弥生時代中期後葉のものであることがわかる。

遺構は、黒色粘土の下面で、溝状遺構1条とピット状の遺構を数穴確認している。溝状遺構は幅1.4m、長さ6m以上、深さ約15cmを測り、南北に伸びる。この遺構から、ここで取り上げる四分枝の木製品が、弥生時代中期の土器や鍬など木製農具と共に出土している。ピット状の遺構は、溝状遺構の西側に数穴確認できるが、直径15cm～20cm程度の小さなもので、その1穴から木杭が出土していることから、杭跡と考えられる。

木製品のうち、用途が判別できるものとしては、鍬・鋤などの農具・椀・匙などの食器、その他、木の実等も出土している。なお、木製品の検出高は、標高4.6m～5.0mの間にある。

3. 蓋の笠骨（浅岡復元論）

近年、幹から放射状に3～5本の枝が張り出した木製品が検出、報告され、その中には蓋の笠骨と目されるものもある。

浅岡俊夫氏は、その論考の中で、各地で出土した蓋の笠骨と考えられる木製品を集成し、2種に分

類した¹¹。さらに、その編年、構造の復元、製作地の追及なども試みている。以下、浅岡氏の型式分類により、蓋の笠骨を略述する。

- I類：幹の同じ高さから放射状に張り出した樹を選び、幹を軸とし枝を腕木とする。例としては、大阪府西岩田遺跡¹²、兵庫県玉津田中遺跡¹³などがあげられる。
- II類：軸受と腕木とからなり、軸受を貫通する孔を軸受孔とする。同じく放射状にはり出した樹を選んでいる。滋賀県黒田遺跡¹⁴、同松原内湖遺跡¹⁵、大阪府下田遺跡¹⁶出土のものなどがあげられる(第3図)。

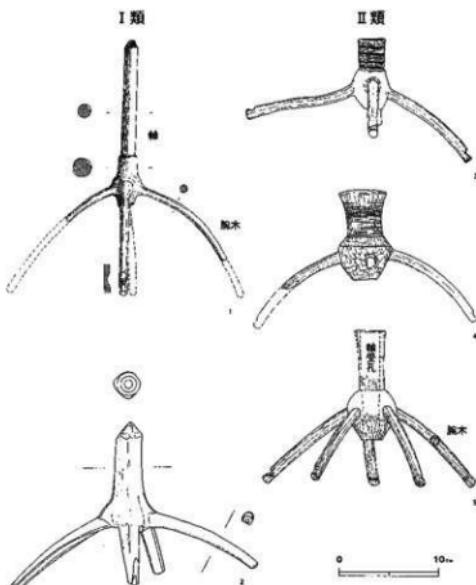
なお、編年案では、I類を古墳時代以前、II類を古墳時代以降製作のものとして捉えている。

また、これら笠骨と考えられる木製品の中には、腕木の先端に抉りを有し、紐巻き痕を残すものや軸受の颈部に糸が巻きつけられたり、黒漆や朱で仕上げられているものもある。

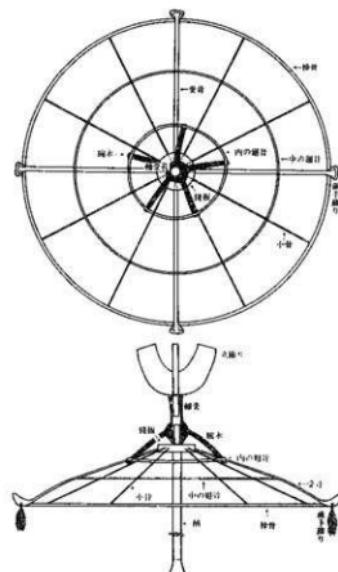
また、浅岡氏は蓋形埴輪の形態からII類笠骨に基づく蓋の構造復元を試みてもいる(第4図)。

4. 天神遺跡出土の四分枝木製品

天神遺跡出土品が蓋の笠骨であるか否かは別として、1つの可能性として、浅岡復元案を基に記述する。



第108図 笠骨の型式分類



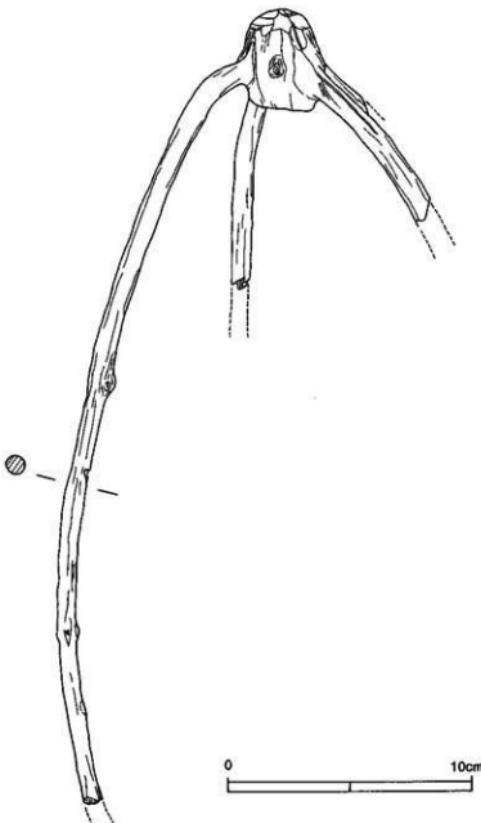
第109図 蓋の骨組復元図
(浅岡俊夫氏による)

笠骨は体部から4方向に放射状に腕木が開く。腕木の4本とも欠損しているが、長いものは、体部からの長さが、33.1cm、直径は9mmである。体部は下部が平坦に切断され、上部1/4は、やや粗いケズリによる調整がなされ、壺を逆さにしたように成形されている。体部高は、4.2cmを測る。腕木は樹皮を剥いだだけの状態で、抉りは有しない。また、黒漆・朱などを塗った痕跡は認められない(第5図)。この四分枝木製品の型式分類を考えてみると、弥生時代中期の製作であり、軸受及び軸受孔を有しないという特徴において、I類の範疇に入るものと考えられる。しかし、その体部はII類笠骨の上下を逆にしたような壺形であり、下部が平坦に切断されており、他例にはない特異なもので、現状では資料が乏しいため、分類することは避けたい。また、体部上面をケズリ出して成形しているが、腕木には明瞭な抉りは認められず、長さも他例に比して長いことから、腕木の長さを調整する前段階の未成品であると考えられる。

5. 蓋の笠骨の分布について

現在のところ、蓋の笠骨と考えられる木製品の出土例は、11府県18例を数える(第6図)。その分布は、西は山口県から東は千葉県にまで広がっている。中でも、近畿地方には11例と集中して分布している。特に、滋賀県では5例と最も出土例が多く、そのうちの4例はII類笠骨で、軸受部に糸が幾重にも巻きつけられ、黒漆塗りにより仕上げられるという同一性を有する。このことは、蓋の機能、地域差、位階差を考えるうえでも大変興味深い。

元来、「蓋」とは、貴人の外出時に日除けとして侍人がさしかける「さしがさ」の一種で、威儀具として機能していた。特に律令制のもとでは、唐令を模範とし、色による区分や房の有無、使用方法などが、位階により細かく規定されていたよう



第110図 天神遺跡出土四分枝木製品実測図

ある。このような背景を考えると、その分布が、畿内に集中していることは容易に説明がつく。しかし、律令制成立以前において、大陸から伝播したと考えられる「蓋」について、北部九州での報告例は少ないようである。これは、大陸からの蓋の伝播が畿内への直接的なものであったのか、現段階での資料不足によるものか定かではないが、今後の研究課題となろう。



第111図 蓋の笠骨と考えられる木製品の出土分布図

6. むすび

以上のように、天神遺跡出土の四分枝木製品を蓋の笠骨と仮定し、紹介してきた。実際に、この木製品が、笠骨として機能していたか否かは別として、その完成形は笠状あるいは袋（籠）状のものになることが考えられる。

しかしながら、この木製品を蓋の笠骨とするには軸又は軸受部が突出せず、体部下面を切断して成形していることなど、他例と相違する点があり、別の用途を検討する必要性もある。いずれにしても今後の資料の増加を望みたい。

註

- (1) 浅岡俊夫「きぬがさの検討—出土木製品笠骨をとおして」『播磨考古学論叢』 1990年
- (2) 『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査』中央南幹線内遺跡調査会 1971年
- (3) 『土津田中遺跡—田中特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1995年
- (4) 『黒田遺跡 3』近江町教育委員会 1994年
- (5) 『松原内湖遺跡発掘調査報告書II—木製品』滋賀県教育委員会 1993年
- (6) 『下田遺跡発掘調査概要—しもだー』下田遺跡調査会 1990年
- (7) 『防府市文化財調査年報II』防府市教育委員会 1980年
- (8) 浅岡俊夫氏の御教示により、蓋の笠骨が出土していることを知った。
- (9) 浅岡俊夫氏の御教示により、蓋の笠骨が出土していることを知った。
- (10) 『唐古・鍛遺跡第21・23次発掘調査概報』田原本町教育委員会 1988年
- (11) 齊藤明彦氏の御教示により、蓋の笠骨が出土していることを知った。
- (12) 『大中の湖南遺跡調査概要』滋賀県教育委員会 1967年
- (13) 『石田三宅遺跡発掘調査報告書II』滋賀県教育委員会 1991年
- (14) 『山崎遺跡』山崎遺跡調査会 1993年
- (15) 『三室間ノ谷遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991年
- (16) 『佐助ヶ谷遺跡（鍛冶税務署用地）発掘調査報告書—第1分冊—』佐助ヶ谷遺跡発掘調査会 1993年
- (17) 『国府関遺跡群』千葉県茂原土地改良事務所・茂原市教育委員会・財團法人長生都市文化財センター 1993年

天神遺跡出土木簡について

木簡の墨書については、島根県古代文化センター岡 宏三が釈読した。また木簡の製法技法については島根県埋蔵文化財調査センター平石 充が検討した。木簡番号の下の数字は法量で、長さ×幅×厚さ（単位mm）。それぞれ最大値、カッコ内は現存長）、統く三桁の数字は『木簡研究』の使用する型式番号である。釈文の表記も『木簡研究』に従った。なお、木簡の製法技法の記述に当たっては、古代木簡の製法技法について述べる山中 草文献1・水沢教子文献2を参照した。木簡表面については実測図上で右にくる面をA面、左にくる面をB面と呼称する。（第112図）

1号木簡 126×30×5 032

釈文

- ・北□武升
- ・□□□よこうへ

製法技法 追査目材。上端・下端ともに、AB両面からのキリ・オリの後、両面からの平面ケズリを施す。ただし、この平面ケズリは面取り的な雰囲気が強く、端部中央には及ばない。上端・下端ともケズリによって角が落とされている。側面はケズリが加えられ、上端にキリカキによる切り込みがみられる。AB両面ともに、斜行する刃の跡が残る。このような痕跡は古代の木簡にも見られるもので、小刀などによるワリサキを示すものか。

2号木簡 151×27×3 033

釈文

- ・[]
- ・[]

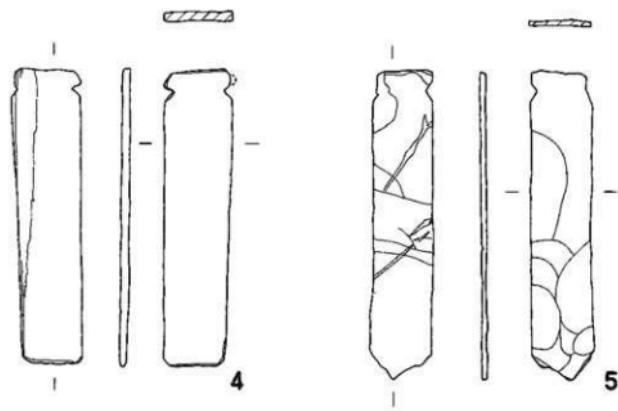
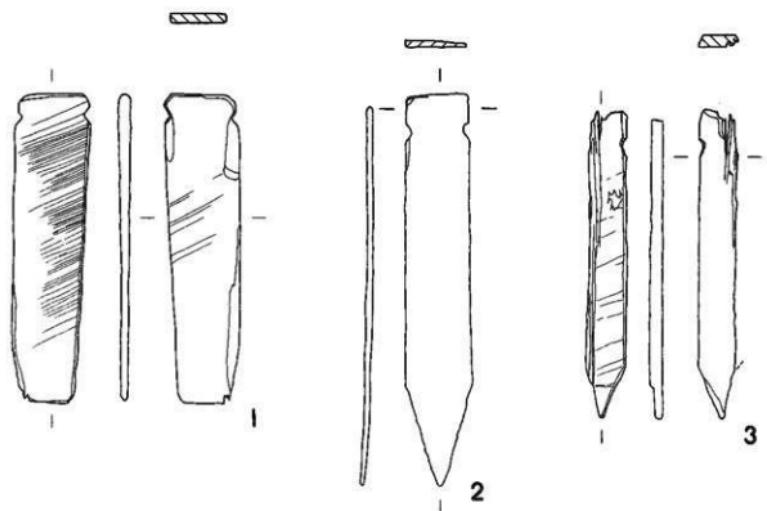
製法技法 追査目材。AB両面に墨痕が見られるが、表面の劣化がひどく釈読できない。上端部はキリ成型のみで調整はない。下端はケズリを加えて鋭くとがらせる。この下端部を除いて、両側面はサキのままで、調整しない。

3号木簡 137×(25)×5 033

釈文

- ・（全面墨による塗りつぶし）
- ・□〔 〕よけうへ

製法技法 追査目材。上端はA面からのキリ・オリ。下端は両側面からのケズリにより、鋭くとがる（A面からの面取りも行われる）。残存する左側面もケズリが認められ、上部にキリオトシによる切



0 10 cm

第112図 天神遺跡出土木簡実測図

り込みがみられる。A面は丁寧な調整が加えられており、平滑である。一方B面は荒いハギトリ状ケズリがみられる。B面下端部に段差が加えられているが、これはとがった下端を何かに挿し込むための加工か。

4号木筒 121×28×4 032

积文

- ・□のみ□内くほ
- ・みの三升

製法技法 柱目材。上端・下端ともに、まず、両面キリ・オリが行われる。次いで、上端はA面から平面ケズリを施し、下端は両面からの平面ケズリを加える。上端部側面にはキリカキによる切り込みが見られる。また、上端・下端ともに角をケズリによって切り落としている。側面はケズリあり。平面調整は劣化のため不明。

5号木筒 126×25×2 木筒学会型式番号033

积文

- ・三升よけうへ
- ・□□□よけ

製法技法 柱目材。上端は両面からのキリ・オリで、ケズリ、面取りは行われない。下端はA面からの片面キリ・オリで鈍角の三角形にする。両側面はともにケズリが加えられる。上端部にはキリカキによる切り込みがある。AB両面とも比較的明瞭なカットグラス状ケズリがみられ、本木筒が小刀等によるケズリによって平面の調整が行われたことがわかる。

小 結

天神遺跡出土の5点の木筒は、いずれも上端部側面に切り込みを持つことから、いわゆる付札木筒に類別することができる。墨書きの記載内容は、いずれも記載が簡略過ぎる上にこの地域（山陰）では、いまだに近世木筒の報告事例がほとんどないために、比較分析し得る材料がなく、具体的用途は現在のところ不明であるが、木筒の付けられた物品の容量と考えられる「三升」（4・5号木筒）「弐升」（1号木筒）のほかに、「よこうへ」（1号木筒）「よけうへ」（3・5号木筒）の記載からは共通した用途で使用されたことがわかる。

これらのうち、1・4号木筒は、追査目材・柱目材と木取りが異なっているが、法量がほぼ同じであるうえ、機能と直接関係しない上端・下端部のケズリや角欠きなどに類似点が多く、1・4号木筒の制作主体の近親性を伺うことができる。一方で、残る2・3・5の制作技法は、1・4号とも異なり、またそれそれ異なる。しかし、先述のように記載内容は、共通する持つ木筒群とすることができる。

以上のように、天神遺跡の木簡は、記載内容や付札という機能からみると一群の木簡とすることができるが、制作技法には共通するものと異なるもののグループがあることが明らかになった。制作技法の異なることについては、下端部に段を有する2号木簡のように、木簡の機能・用途による差とすることもできるが、上端・下端のキリ・オリ後のケズリのあり方、5号木簡のカットグラス状ケズリなどは、木簡の二次的利用の問題も視野に入れながら、製作主体の差である可能性を考えるべきであろう。

なお、木簡の製作技法が検討されている古代とは異なり、近世木簡では台鉋などの工具による成形・調整も考えられるが、1・3・5号には、ハギトリ状ケズリ・カットグラス状ケズリがみられ、古代の木簡同様の小型の刃物による調整が確認できた。

近世の木簡の場合、武家や公家が荷物輸送の際に用いた「絵（会）符」や、水戸藩領における江戸廻送用の「御城米」に取り付けた「城米札」など、文献によって用途や機能がかなり詳細な部分まで明らかになった事例がある。本遺跡出土の木簡についても、今後、近世文献史料から、用途が解明される可能性があるといえる。

文献1 山中 章「考古資料としての古代木簡」『木簡研究』14 1995年)

文献2 水沢教子「岸代遺跡群出土木簡の製作技法と施業方法」『長野県岸代遺跡群木簡』

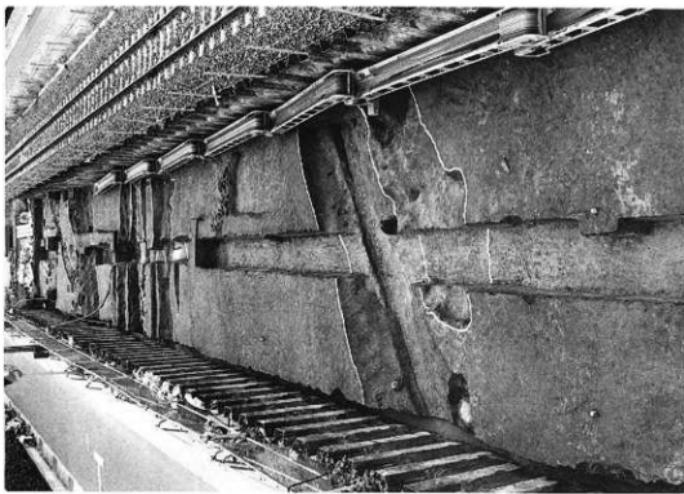
長野県埋蔵文化財センター 1996年)

天神遺跡木簡の制作技法

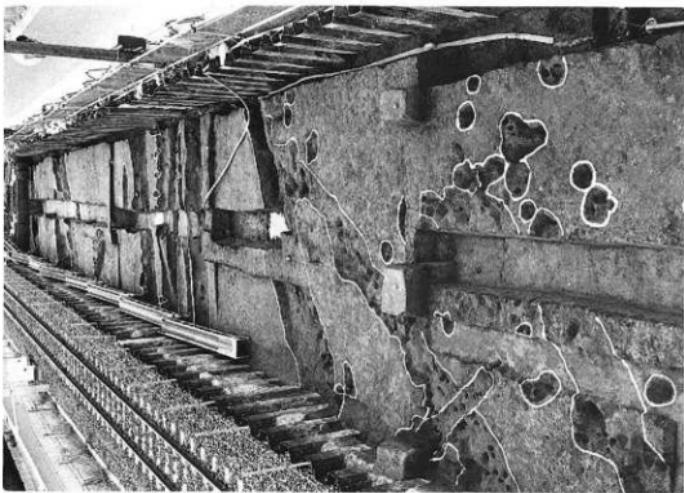
	成 形 と 調 整					下端 形状	備 考
	上 端	下 端	左 右 両 面	A 面	B 面		
1号	キリ・オリの後 両平面よりケズリ	キリ・オリの後 両平面よりケズリ	ケズリ	ハギトリ状 ケズリ	ハギトリ状 ケズリ	】	上下端角欠き。
2号	キリ・オリ	両側面よりのケズリ	—	劣化により 不明	劣化により 不明	×	
3号	欠 損	A平面よりケズリ	—	ハギトリ状 ケズリ	ハギトリ状 ケズリ	×	B平面下端段差あり。
4号	キリ・オリの後 A平面よりケズリ	キリ・オリの後 両平面よりケズリ	ケズリ	劣化により 不明	劣化により 不明	】	上下端角欠き。
5号	キリ・オリ	キリ・オリの後 A平面よりケズリ	ケズリ	カットグラス	カットグラス	×	

A 区 図 版

A区全景（東から）



A区全景（西から）



図版 2



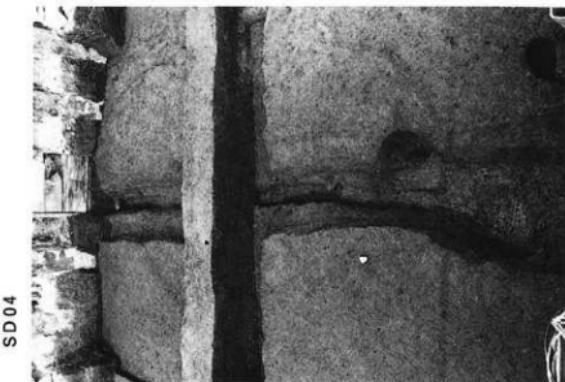
SD 01・02付近調査風景



SD 03 杯出土状況



同上（近景）



図版 4



SD 10



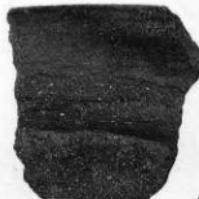
大溝 2 (東側)



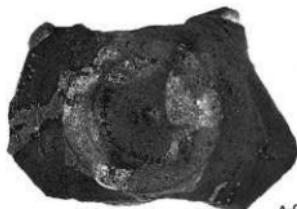
大溝 2 東肩土層断面



SD 02 出土遺物



SD 03 (A-4~7) 及び12層中 (A-8) 出土遺物



SD 04 出土遺物

SD 05 出土遺物

SD 06 出土遺物

図版 6



SD 07 出土遺物



SD 14 出土遺物



大溝 1 出土遺物



大溝 2 出土遺物



SD 15 出土遺物



SD 15 出土遺物

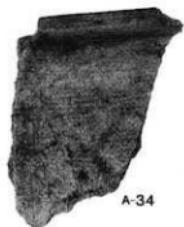


土坑 1 出土遺物

遺構外出土石製品



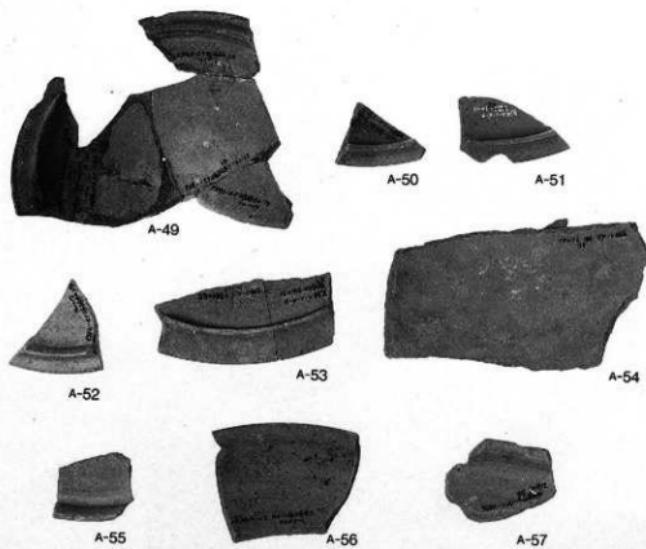
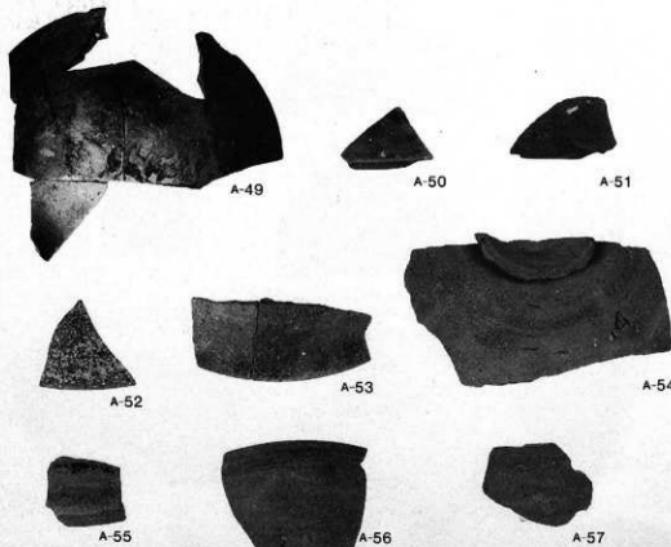
図版 8



遺構外出土弥生土器・古式土師器

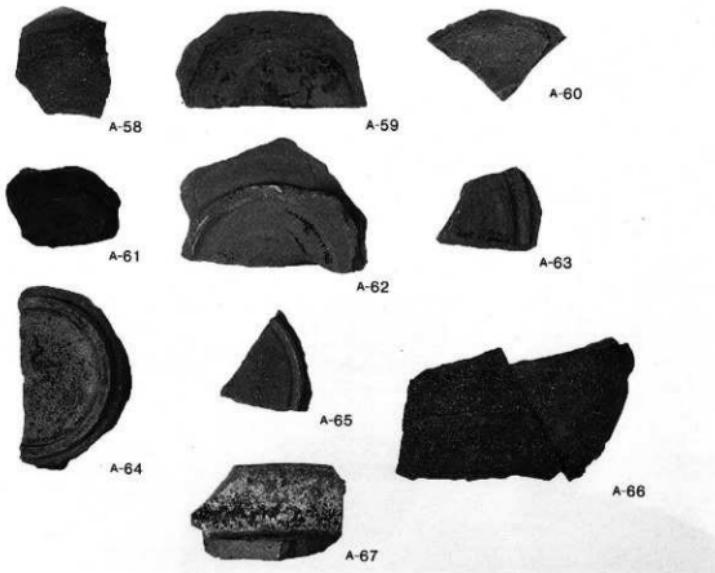


遺構外出土土師器

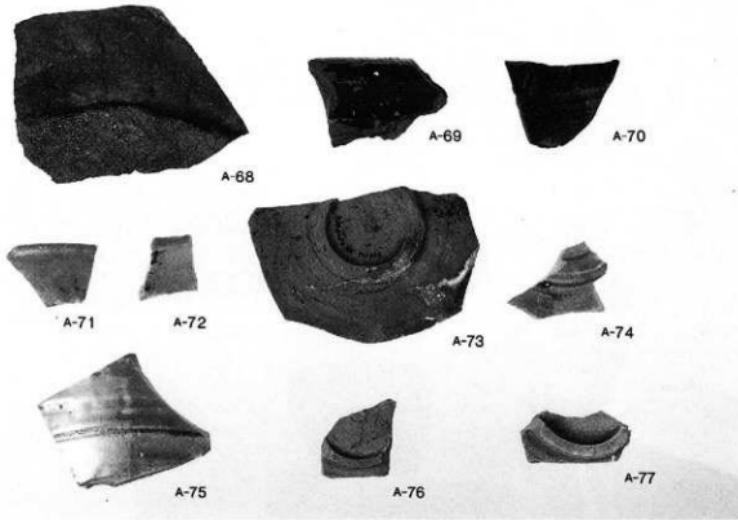


遺構外出土須恵器 1 (上段—外面、下段—内面)

図版10



遺構外出土須恵器 2

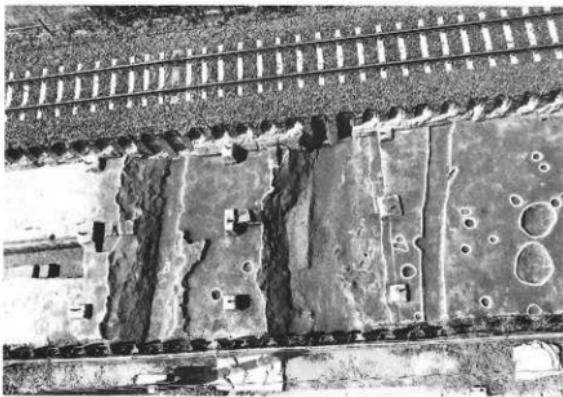


遺構外出土陶磁器

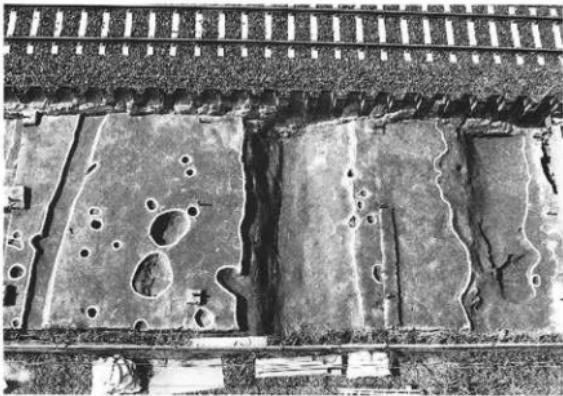
B 区 図 版



発掘調査区遠景（西より撮影）



遺構空中写真
(左よりSD05、SD06、SD02、
SK01、SK02)



遺構空中写真
(左よりSD02、SD01、SK02、
SD03、SD04)

图版12



弥生土器出土状况（遺構外）



SD 03 調査状況



SD 03 検出状況



SD 03 断面 (部分)



SD 03 断面 (全体)



SD 05 遺物出土状況

图版14



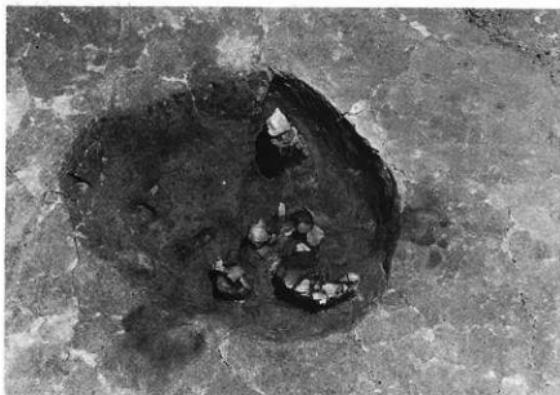
SD 05 遗物出土状况



SD 05 断面



SD 05 检出状况（完掘）



図版16



SD 04 断面



SD 04 検出状況



SD 06 検出状況（完掘）



图版18



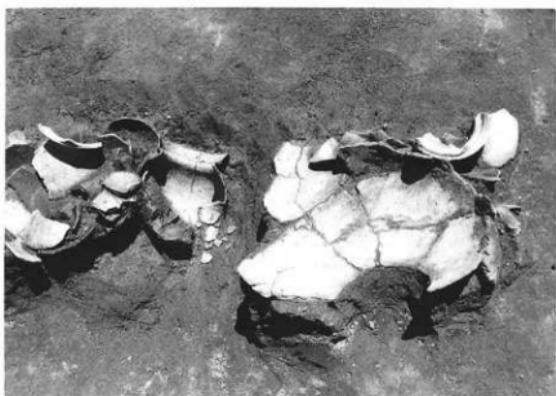
SD 06 检出状况（南側）



SD 06 遗物出土状况（北側）



SD 06 遗物出土状况（部分）



SD06 遺物出土状況（部分）



SD06 遺物出土状況（部分）



SD06 遺物出土状況（部分）

图版20



SD06 遗物出土状况（部分）



SD06 遗物出土状况（部分）



SD06 遗物出土状况（部分）